

祝聲ニ送ラレテ港ヲ出テ、午後四時頃、「ロシーヤ」「グロモボイ」「リユーリク」「ボガツイリ」ノ順序ニテ單縦陣ヲ制リ、汽船一隻ヲ伴ヒ、我カ津輕海峽方面ニ向ヒテ出發セリ、是我カ艦隊ノ一部ヲ南方ヨリ誘致センカ爲メ、津輕方面ニ牽制運動ヲ行ヒ、夫ヨリ轉シテ我カ軍ノ上陸地點タルヤヲ疑ヘル元山津ヲ偵察セントスルニ在リキト云フ、此ノ如クニシテ、彼ハ十一日午前津輕海峽附近ニ達セシニ、偶我カ汽船奈古浦丸(總噸數千八百四噸ニシテ十日午後十時十分羽)艦作崎ヲ右舷正横十海里ニ見テ、北四分ノ三東ニ針路ヲ取りテ航行中、午前十時三十分頃、端ナクモ前記ノ露國艦隊ニ會シ、其ノ包圍スル所トナレリ、而テ彼ハ空砲一發ヲ放チテ同船ヲ停止セシメ、其ノ日本船タルヲ知ルヤ、早ク船ヲ見捨ツヘキヲ命シタルヲ以テ、船員ハ直ニ端舟降下ニ著手シ、彼ニ向ヒテ救助ヲ與ヘンコトヲ要求セシカ、彼ハ幾モナク實彈ヲ發射シ始メタルヲ以テ、船員周章辛ウシテ、二隻ノ端舟ニ乘シ、本船ヲ離レシモ、後チ「グロモボイ」ニ收容セラレ、奈古浦丸ハ「ロシーヤ」ノ爲メニ撃沈セラレタリ、之ト前後シテ、彼ハ復他ノ汽船全勝丸(總噸數三百二十三噸ニシテ奈古浦丸ト前後シテ酒田ヲ發シ小)ヲ認メ、之ヲモ砲撃シ、其ノ傾斜スルヲ見ルニ及ンテ、砲撃ヲ止メタルモ樽ニ向ヘルモノナリ、(全勝丸ハ後チ北海道福山ニ著セリ、而テ彼カ之ヲ撃沈セサリシハ其ノ出)然ルニ天候漸ク險惡トナリタルヲ以テ、露國艦隊ハ長ク陸岸近クニ游弋スルヲ止メ、韓國新浦ニ向ヒシカ、同日ヨリ荒天續キタルヲ以テ、十四日午前六時頃ヨリ、韓國沿岸ニ航スルノ目的ヲ變シ、午後三時頃、浦鹽斯德ニ歸著セリト云フ、

### 第三章 第二艦隊ノ浦鹽方面第一次出動

#### 第一節 第二艦隊ノ行動

開戦後數日ヲ出テサルニ、浦鹽斯德ノ敵艦隊ハ、我カ北海ニ出現シ、幾モナク其ノ踪跡ヲ晦マセリト雖モ、引續キ元山方面ヨリモ、露艦ノ出沒スルカ如キ情報アリ、且今後彼ノ時々出動スルコトアルヘキヲ察シタルヲ以テ、大本營ニテハ、浦鹽斯德方面ヲ威嚇シ置クヲ得策ト認メ、伊東海軍々令部長ハ、二月二十九日、東郷聯合艦隊司令長官ニ向ヒ、左ノ命令ヲ發セリ、

貴官ハ爲シ得ハ麾下兵力ノ一部ヲ分遣シ之ヲシテ浦鹽斯德方面ノ威力偵察ヲ行ハシムヘシ(大海令第七號)

是ニ於テ東郷聯合艦隊司令長官ハ、第二戰隊等ヲ派遣シ、尙此ノ序ヲ以テ、亞米利加灣及ヒボシエツト灣附近ニ出沒セシメ、以テ陸上ノ敵ヲ牽制セント欲シ、三月一日、上村第二艦隊司令長官ニ向ヒテ、左ノ訓令ヲ與ヘタリ、

一、情報其ノ他ニ依ルニ旅順方面ニ於ル敵ハ退嬰シテ出動セサルモ浦鹽ノ敵ハ時々元山津附近迄游弋セルモノ、如シ

二、貴官ハ第二戰隊(常磐千早)及ヒ第三戰隊ノ笠置吉野ヲ率非急速出發シ捷路ヲ經テ浦鹽港前面ニ出現シ該方面ニ於ル海上ノ敵ヲ撃破若クハ威嚇スルト同時ニ亞米利加灣ボシエツト灣附近沿岸ニ出沒シテ陸上ノ敵ヲ該方面ニ牽制スルヲ努メタル後チ朝鮮海峽ニ向ヒ歸航スヘシ

其ノ浦鹽方面ニ止ルハ三日以内ヲ以テ足レリトス  
三、此ノ行動中對州無線電信所及ヒ城津若クハ元山津電信局ニ依リ當隊トノ通信連絡ヲ保  
持スルニ努ムヘシ

四、此ノ行動中爲シ得ヘクンハ其ノ麾下ノ一部ヲシテ元山津ニ到ラシメ居留帝國臣民ヲシ  
テ安堵セシムルヲ可トス

五、此ノ行動ヲ了レハ佐世保ニ入港シ急速炭水ヲ滿載シテ入口浦ニ來リ後命ヲ待ツヘシ  
六、此ノ行動ノ航路及ヒ航行日程ヲ豫定セハ報告シ置クヘシ

七、當方面ニ殘レル聯合艦隊ノ大部ハ更ニ旅順ノ敵ニ對シ作戰スルト同時ニ根據地ヲ海州  
邑錨地ニ前進シ且大同江以北ノ經路ニ著手スル豫定ナリ又新ニ聯合艦隊ニ編入セラレタ  
ル第三艦隊ニハ別紙聯隊機密第一七五號（編者曰ク別紙略ス本篇第二章）ノ如ク訓令シ置  
ケリ（聯隊機密第  
一七四號）

依テ上村司令長官ハ、右訓令ニ基キ、直ニ麾下ノ諸艦ヲシテ、陸地砲撃用トシテ、八尹砲一門ニ  
付通常榴彈十發宛ヲ搭載セシメ、又左ノ命令ヲ發セリ、

一、情報ニ依レハ旅順方面ニ於ル敵ハ退嬰シテ出動セサルモ浦鹽ノ敵ハ時々元山津附近迄  
游弋スルモノ、如シ

二、第二戰隊（常磐千早）及ヒ第三戰隊ノ笠置吉野ハ浦鹽方面ニ於ル海上ノ敵ヲ擊破若クハ威  
嚇スルト同時ニ同海面附近沿岸ニ出沒シテ陸上ノ敵ヲ該方面ニ牽制スルヲ努ムヘキ任務

ヲ有ス

三、之カ爲メ當艦隊ハ三月二日午前八時當地點（編者曰クハ）ヲ出發シ豫定行動ノ要領ニ遵ヒ  
運動セントス

四、此ノ行動中警戒航行序列及ヒ艦船番號等ヲ左ノ如ク定ム



原速九節（此ノ出動中特令アル場  
合ノ外此ノ速力ヲ用フ） 微速五節 舵角十五度

五、此ノ出動中敵ニ會シタルトキ笠置吉野ハ先任艦長ノ指揮ノ下ニ機宜運動スヘシ

六、此ノ出動中鬱陵島以北ニ於テハ左ニ掲クル規約信號ノ外萬止ムヲ得サル場合ニアラサ  
レハ無線電信ヲ使用スヘカラス

「ロ」符連續 露國艦隊(船)見ユ

「カ」符連續 本隊ニ歸レ

七、本艦隊ハ此ノ行動了レハ佐世保ニ入港シ急速炭水ヲ滿載シ第一集合點（編者曰クハ）ニ來  
ルヘキ豫定

八、當方面ニ殘レル聯合艦隊ノ大部ハ更ニ旅順ノ敵ニ對シ作戰スルト同時ニ根據地ヲ海州  
邑錨地ニ前進シ且大同江以北ノ經路ニ著手セラル、豫定ナリ又新ニ聯合艦隊ニ編入セラ

レタル第三艦隊ハ以前ノ任務ヲ續行シ其ノ第七戰隊ハ該方面ニ必要ナル艦船ヲ除キ第一  
 集合點ニ前進スヘキ命ヲ受ケタリ(乙隊機密第 一八一號)

月日	豫定行動ノ要領	記	事
三月二日	午前八時第一集合點ヲ出艦シ浦鹽港外ニ向ヒ直航ス		
三日			對馬海峽通過ノ際對州無線電信所ヲ經テ聯合艦隊等ト連絡ヲ保持ス
五日	午後六時第三小隊ヲシテ亞米利加灣ニ向ヒ翌朝同海視察ノ上浦鹽港外ニ在ル本隊ニ合セシム		
六日	早朝ウスリー灣ニ達シ浦鹽港東口及ロアムール灣口附近ヲ視察シ夜間ハ灣口ヲ去リ翌朝ボシエツト灣外ニ到ル如ク行動ス		
七日	早朝ボシエツト灣外ニ現レ同灣ヲ視察シ次ニ羅津灣外ニ移リ同灣ヲ視察ラナス		
八日	午前城津午後新浦ヲ視察シ夜間ハ沖合ニ出ツ		
九日	早朝元山津ニ到リ時宜ニヨリ艦隊ノ一部ヲ入港セシメ午後同灣外ヲ去リ佐世保ニ直航ス	元山津電信局ニヨリ聯合艦隊ト連絡ヲ通ス	
十一日	午後佐世保入港		

備考

- 一、此ノ出動中中央標準時ヲ用フ
  - 二、此ノ出動中ノ豫定航跡及ヒ速力等ハ附圖(編者曰ク別冊附圖ニ)ニ記載スル所ノ如シ
  - 三、此ノ出動中各艦ハ常ニ十二節ノ速力ニ對スル汽力ヲ蓄ヘ置クヘシ
- 二日午前八時上村第二艦隊司令長官ハ、前記ノ艦隊ヲ率非テ入口浦ヲ出發シ、長竹水道ヲ經テ朝鮮海峽西水道ニ向ヒ、三日午前四時頃竹邊灣沖ニ於テ、吾妻ヲシテ海峽通過ノコトヲ大本

營及ヒ東郷聯合艦隊司令長官ニ通信スヘキヲ、第五戰隊ノ嚴島ニ依頼セシメシニ、其ノ際同艦ヨリ、二月二十三日、浦鹽ヲ出テタル和蘭國商船「フオルミナ」號ハ、出發スルニ當リ、ガルドピン岬ヨリナシモク岬ヲ通過シ終ルマテ、露國將校水路嚮導ヲナシタリ、トノ情報ヲ受ケタリ、午前八時二十分ヨリ、速力ヲ七海里半ニ減シ、更ニ笠置ヲシテ、對州ニ近ツキ、情報アルヤ否ヤヲ問ハシメ、他艦ハ航進ヲ續ケ、正午更ニ六海里半ニ減速シ、同時ニ針路ヲ北十八度東トシテ、浦鹽斯德港外ニ向ヒ、午後四時六分、九海里ニ復セシニ、同十分笠置復隊シ、三月一日韓國明川附近ニ露艦ノ如キモノ出沒ス、トノ外情報アラサル旨ヲ報セリ、尋テ上村司令長官ハ集合地點ヲ第二八五地點(北緯三十八度東經百三十八度三十分)ト定メ、夜間ハ警戒序列ニ移リ、(本行動中毎夜)四日集合地點ヲ第四九九地點(北緯四十一度三十分)トシ、午後六時ヨリ七海里ニ減速シ、第三小隊タル笠置、吉野ヲシテ總艦ニ點火セシメ、出雲以下ノ第一、第二小隊ニモ、翌日午前七時迄ニ之ヲ行フヘキヲ命セリ、此ノ夜十一時三十分頃、出雲等ハ不明ノ無線電信符ヲ感シ、淺間艦長海軍大佐八代六郎ハ、同符中ニ「其處ニナル露語アルヲ判斷シタルヲ以テ、上村司令長官ハ、各艦ニ向ヒテ、受信機ヲ鋭敏ニ調整シテ、受信ニ注意スヘキコトヲ命セシモ、其ノ後異狀ナク、五日午前八時ヨリハ、針路ヲ北西トシ、九海里ニ増速セリ、是一ハ六日天明後、伯都爾大帝灣ニ達スルカ爲メ、一ハ前夜ノ疑ハシキ電信ニ由リ、陸岸ニ接近セハ、或ハ敵ニ會スルノ機アルヘシ、トナシタルヲ以テナリ、尋テ九時同司令長官ハ、浦鹽斯德港内ニ對シ、飛越射撃ヲ試ミル場合ニ於ル射撃要領ヲ左ノ如ク定メテ、之ヲ各艦ニ訓令セリ、(本行動中ハ總テ信號ヲ用)無線電信機ヲ使用セス)

浦鹽斯德港内ニ對シ飛越射撃ヲ試ミル時ハ此ノ要領ニ依ルヘシ此ノ要領ハ内示第一種第八六號浦鹽斯德防備設計圖(別冊附)ニヨリ了解スヘシ

射撃目標ハ八尹砲ハ船渠附近六尹砲ハ第十五第十八砲臺若クハB.P. No. 3ト記セル砲臺トシ射撃區域ハ船渠背後ニ在ル高サ五九、五五ノ點ト東海岸ニ近キ高サ五四、四六ノ山嶺トヲ通シ引キタル直線ヲ南方ノ界限トシ同海岸嶮崖上三、七九五ト記載セル點ト港内南岸ニ記載シアル官立製粉所ノ粉ノ字トヲ貫キ浮船渠ノ内東方ノ分ヨリ南方三百米突ノ點ニ達スル直線ヲ北方ノ界限トシ射撃航路ハ南北ノ界限線上二万米突ノ點ヲ結ヒ附ケタル線上ト概定シ射撃距離ハ八尹ニ在リテハ船渠ノ實際距離ニ五百米突六尹ニ在リテハ諸砲臺ノ距離ニ四百米突ヲ氣温修正ノ爲メニ加ヘタルモノトシ照準點ハ南方ノ界限線ニ近キ所ニテハ同線上五、四四六點ノ山嶺ノ下ノ水準線上北方ノ界限線ニ近キ所ニテハ同線上三七、九五點ノ直下水準線又其ノ中間ニ在リテハ殆ト右二點ノ中間ニ在ル山嶺ノ直下ノ水準線トス猶艦隊ノ運動法等ハ追テ令スヘシ

尙十時四十六分ニ至リ上村司令長官ハ、同日午後六時ヨリノ豫定行動ヲ變更シ、笠置、吉野ヲシテ、飛越射撃施行中港口ヲ監視シ得ヘキ地點ニ到リ、砲臺ノ彈著距離以外ニ在リテ、敵ノ動靜ヲ監視セシメ、機宜ノ運動ヲ執ルコトニ定メタリ、然ルニ幾モナクシテ濃霧ニ會シ、後續艦ヲモ見ル能ハサルニ至リシヲ以テ、同司令長官ハ、陸岸ニ遠サカラシメンカ爲メ、午後一時針路ヲ北微東トセシニ、同時頃ヨリ、北西風漸ク強吹シ、濃霧ハ霽レタレトモ、雪降レリ、尋テ二時東微北ニ

變針セシニ、幾モナク雪止ミ、韓國高山ノ嶺ヲ發見シ得、三時速力ヲ七海里トシ、四時針路ヲ北六十六度東ニ變シ、六日午前六時ニハ、アメリカ灣附近ノ陸地ヲ左舷ニ認メタルヲ以テ、同三十五分、北西二分ノ一北ニ變針シテ之ニ近ツキ、速力ヲ九海里トシ、七時十一分ニハ、アスコルド島ヲ確認セシニヨリ、其ノ西方ニ向ヒテ變針シ、八時十海里トシ、(同三十五分淺間ノ二等機關兵ヲ海中ニ落テテ溺死セリ)十時同島ニ竝ヒ、漸次速力ヲ増加シテ十二海里トナシ、上村司令長官ハ、麾下ニ向ヒ、實彈發射前空砲一發ヲ放ツヘキコトヲ命ジ、豫定砲撃地點ニ向ヒテ進ミシニ、同二十五分、浦鹽斯德港ノ東口ニ方リテ、數條ノ煤烟ヲ認メタリ、然ルニ近ツクニ從ヒ、漸次消散シテ船影ナク、港口及ヒツスリ一灣ハ、結氷海面ヲ蔽ヘリ、既ニシテ正午頃ヨリ、我カ艦隊氷界ニ入り、結氷ヲ破碎シテ暫ク進ミタルモ、上村司令長官ハ、其ノ儘直進スルノ不利ナルヲ認メタルヲ以テ、針路ヲ轉シ、結氷ノ甚シカラサル方面ヲ選ビ、速力ヲ増減シツ、航進シ、午後零時四十二分ヨリ、笠置、吉野ヲシテ列ヲ離レ、敵砲臺ノ彈著距離以外ニ在リテ港口ヲ監視セシメ、他艦ヲシテ、一時十七分ヨリ戰鬪部署ニ就カシメ、同三十五分、スクリプレツフ燈臺ヲ北七十八度西七海里半ニ見ル地點ヨリ、針路ヲ北六十度西トシテ前進セリ、此ノ時港内ボスバロツフ燈臺附近ニ、二櫓一煙突ナル二隻ノ小蒸氣船アリ、同五十一分正面ヲ右方ニ變換シテ、針路ヲ北三十五度東トシ、同五十三分ヨリ八尹砲ノ間接射撃ヲ開始セリ、然ルニ敵砲臺ハ敢テ應砲セズ、唯砲臺ニ兵員ノ東奔西走スルアルノミ、尋テ同五十五分我ハ面舵ニ轉シ、北六十度西ノ針路ニ復シ、更ニ前進シテ、陸岸ヲ距ル約四千米突ニ近ツキ、二時十分右方ニ正面變換ヲ行ヒ、北

三十五度東ノ針路ヲ執リ、八尹砲ハ、一万乃至一万三千五百米突ヲ測リテ造船廠、船渠附近ヲ目的トシ、六尹砲ハ、五千乃至八千五百米突ヲ測リテ諸砲臺ヲ目的トシ、再砲撃ヲ加ヘシモ、敵砲臺復タ應砲セス、尋テ同二十分回頭シテ南々東ニ變針シ、同二十七分射撃ヲ止メ、同三十一分スクリブレツフ燈臺ヲ西六海里ニ見テ、針路ヲ南二分ノ一東ニ定メ、以テ東口ヲ引揚ケ、笠置、吉野ヲ合ハセタリ、而テ其ノ發射シタル彈數ハ、八尹彈百六發、六尹彈百三十發、合計二百三十六發ナリ、(各艦ノ戰闘詳報ハ備考文、書及ヒ別冊附圖附表參照)

尋テ上村司令長官ハ、麾下ニ向ヒ、午後五時ヨリ速力ヲ七海里ニ減シ、七時ヨリ針路ヲ正東ニ、七日午前二時ヨリ針路ヲ北西ニ變シ、六時ヨリ八雲、磐手(第二)ハ、アメリカ灣ヲ、笠置、吉野(第三)ハ、スツレローク灣ヲ、偵察スヘキヲ命セリ、是同夜ハ沖合ヲ迂航シ、翌朝再港口ニ迫リ、敵出ツレハ之ト決戦シ、出テサレハ威嚇行動ヲ執ラント欲シタレハナリ、然ルニ五時アスコルド島ニ接近シタル頃、東口ニ煤烟ノ上ルヲ認メシモ、時漸ク日没ニ近キヲ以テ、上村司令長官ハ、港口ニ逼ルヲ不利ナリトナシ、依然沖合ニ向ヒ、豫定ヲ變シ、十二海里ノ速力ヲ續ケシニ、幾モナクシテ煤烟ハ消散シ、(當時磐手ハ浦鹽主戰艦隊四隻ヲ確認シ出、同司令長官ハ、再麾下ニ向ヒ、午後七時ヨリ速力ヲ八海里半トシ、八時ヨリ針路ヲ東ニ變シ、其ノ他ハ豫定ノ如ク行動スヘキコトヲ令セリ、

既ニシテ、七日午前六時ニ至リシヲ以テ、豫定ノ如ク、八雲、磐手ハアメリカ灣ニ向ヒ笠置、吉野ハスツレローク灣ニ向ヒ、出雲、吾妻、淺間ハ、海岸ニ沿ヒテ沖合ヲ西航シ、十時ニ至リ、三隊相合

シ、上村司令長官ハ、兩灣トモ異狀ナキヲ知リシヲ以テ、同二十一分十二海里ニ増速シ、十一時アスコルド島ヲ過キ、針路ヲ北方ニ轉シ、再浦鹽斯德港ノ東口ニ向ヒ、正午彈著距離外ニ到達セシニ、敵艦隊ハ前夜中港内ニ入りシモノ、如ク、煤烟タモ認ムル能ハサルノミナラス、陸上砲臺モ亦依然トシテ發砲セス、是ニ於テ同司令長官ハ、約一時間沖合ニ於テ威嚇行動ヲ行ヒタル後、午後零時二十二分ヨリ、更ニボシエツト灣沖ニ游弋シ、(此ノ際午後零時五十分ト二時二十分トノ長ノ判讀ニヨレハ前者ハ南ニモ西ニモ敵ナシ敵ハ露西亞島ノ附近ニ在リ後者ハ敵ハ此ノ島ニ覆ハレタリトノ通信ナリシト云フ)四時十五分同灣内ヲ一周シタルモ、亦敵ヲ發見セス、陸上特別ナル新設防禦工事ヲモ認メサリシヲ以テ、乃チ城津ニ向ヒ、八日午前八時五十分同灣ニ近ツキ、六百米突ノ間距離ニテ灣内ニ入り、吉野ヲ留メ、同艦長海軍大佐佐伯闇ニ向ヒ、我カ領事館ト情報ヲ交換シタル後チ、馬養島沖ニテ合スヘキヲ命シ、他艦ハ灣外ニ出テ、常距離ニ復シテ新浦ニ航行セシニ、午後一時十二分吉野歸隊シ、城津方面ノ異狀ナキコト、露艦ノ來リタルコトアラサルコト、鏡城ニ前日露國騎兵七十名許來リタル由ナルコト、居留人民五十名總テ無事ナルコト等ヲ報告シ、且二月二十九日浦鹽ヲ發シ、室蘭ニ入港セシ頃國汽船ヨリ、浦鹽艦隊四隻十九日頃出港シ、同船出港ノ時迄ハ、未タ歸ラザリシコト、港内ニハ舊式木製軍艦一隻運送船一隻汽艇十二隻、露國商船一隻アリシコト等ノ情報ヲ得タル旨ノ伊集院海軍々令部次長ノ電報ヲ齎セリ、尋テ四時二十八分新浦港外ニ達シ、出雲ノミ視察ノ爲メ入港シ、異狀ナキヲ確メタル後チ、港ヲ出テ、僚艦ト合シ、五時二十五分元山津ニ向ヒ、上村司令長官ハ、諸艦ニ向ヒ、總艦點火ヲ止メ、十二海里ノ速力ニ對スル蒸氣ヲ保ツヘキヲ令シ、九日

午前八時元山津ニ著シタリシニ、(元山津ニハ英艦フヒニツク及ヒ陸軍運送船住ノ江丸アリ、フヒ住ノ江丸ハ陸軍交代兵ヲ乗セ我カ艦隊ヨリ航路安全ノ報ヲ得同十一時本邦ニ向ヒ出港セリ)元山副領事大木安之助及ヒ陸軍守備隊長陸軍歩兵少佐高木練吉、上村司令長官ヲ訪問シ、元山方面ノ平穩ナルコト等ヲ告ケ、且伊集院海軍々令部次長ヨリノ電報ヲ交付セリ、之ニ依テ同司令長官ハ、聯合艦隊ノ七日八口浦ヲ發シテ旅順ニ向ヒ第四次ノ行動ヲ開始セシコト、露國側ヨリ、今回ノ浦鹽斯德砲擊ノ結果ハ損害ヲ與ヘスト傳ヘラレシコト、及ヒ露國砲臺ハ我カ艦隊ノ接近スルヲ待チ遂ニ應砲セサリシコト等ノ情報アリタルヲ知り、又高木陸軍守備隊長ヨリ、元山ニハ、目下一大隊駐在シ居ルコト、同隊ヨリ一小隊ヲ八日咸興ニ派遣セシコト、同地ハ排日感念ヲ有スルカ爲メ、示威ノ目的ヲ以テ、當分二分隊ヲ同地ニ殘シ置ク筈ナルコト等ノ通報ヲ受ケタル後、午後一時出雲以下ハ出港シテ佐世保軍港ニ向ヒ、十一日午前零時二十分頃朝鮮海峽西水道ニ入り、(三月二日ヨリ十一日ニ至ル航跡ハ別冊附圖參照)上村司令長官ハ、平戸島無線電信所ヲ介シテ、鯨島佐世保鎮守府司令長官ニ、炭水ノ準備及ヒ各艦多少ノ修理ヲ要スルニ付、入港後、直ニ検査官ヲ派遣セラレタキコトヲ電報シ、十時三十分同軍港ニ入港シ、炭水ノ補充及ヒ應急修理ヲ施シ、十四日出發シテ、十六日海州邑ニ歸著シ、第一戰隊等ト共ニ、再旅順口方面ノ行動ニ參加セリ、(本部第二篇第七章第八章第九章參照)

第二節 浦鹽斯德艦隊ノ狀況

浦鹽斯德艦隊ニ在ル敵艦隊ハ、開戦ノ報ヲ得、直ニ第一ノ出動ヲ我カ北海ニ試ミ、轉シテ韓國元山津ヲ偵察セントシ、荒天ノ爲メ果サスシテ、二月十四日浦鹽斯德ニ歸港シ、二十四日更ニ

元山津偵察ノ途ニ上リ、二十六日朝元山津沖ニ達セシモ、遂ニ得ル所ナカリシヲ以テ、針路ヲ北ニ轉シ、陸岸ニ沿ヒテ偵察シツ、北上シ、夕刻ヨリ再反轉シテ元山ニ向ヒ、二十七日午前港口ニ達シテ、愈々港内ニ我カ船舶ナキヲ確メ、其ヨリ終日沿岸ヲ航行シ、附近諸灣ヲ偵察シ、夜ハ沖合ニ游弋シ、二十八日頃ヨリ歸港ノ途ニ就キタルモノ、如ク、二十九日夜ハ、浦鹽斯德港外ニ達シテ漂泊シ、三月一日入港セリ、而テ六日ニ至ルマテ、ボスフオラス海峽ノ入口(編者曰ク、パリス灣ニシテニ碇泊シタリシニ、同日午前アスコルド島ヨリノ無線電信(編者曰ク、我が第二艦隊ハ六日七日に共ニアスコルド島附近ニ到リシモ無線電信柱ヲシキモノヲ認メサリシヲ以テ同電信所ハ露西亞島又ハボポー島ニ在ルモノト推定セリ)ニヨリ、我カ艦隊ノ來航ヲ知レリト云フ、是ニ於テ司令官レイツエンシテイシハ、直ニ麾下ニ向ヒテ、總艦ニ點火シ出航準備ヲ整フヘキヲ命シ、正午頃各艦整備セリト雖モ、同司令官ハ、我カ艦隊ノ艦型、隻數等ノ報道ヲ受ケ、到底敵スヘカラサルヲ察シタルモノ、如ク、我カ艦隊ノ南方ニ引上ケタル頃ヨリ漸ク拔錨出港セルモ、其ノスクリプレツフ島ヲ通過セシ頃ハ、遙ニ我カ艦隊ノ櫓柁ヲ認ムルニ過キス、尙約二十海里我ヲ追躡シタル後、再浦鹽ニ引返シ、港内ニ入レリト云フ、又我カ砲彈ハ、市ノ東部、グニロイ角(編者曰ク、金角港ノ港奥ナリ)及ヒ工廠等ニ落下シ、其ノ一彈ハ、海軍團ノ兵舎ニ落ち、水兵四名ニ重傷ヲ負ハセ、婦人一名ヲ即死セシメ、海軍病院ノ附近ニモ、亦落彈アリシト云フ、

第四章 第二艦隊ノ浦鹽方面第二次出動

第一節 第二艦隊第二次出動

明治三十七年四月三日、大本營海軍參謀海軍中佐財部彪、同海軍少佐殖田謙吉ノ、伊東海軍々令部長ノ命ヲ帶ヒテ聯合艦隊ニ使シ、陸軍トノ共同作戰等ニ就キ協議スルニ當リテヤ、好機アラハ、再浦鹽斯德方面ニ作動スヘキコトニ關シ、豫メ議スル所アリキ、然ルニ同月十三日ヨリ十五日ニ彌レル第七次、第八次ノ旅順口攻撃ハ、好結果ヲ奏シ、敵ハ其ノ司令長官ト共ニ、一戰艦一驅逐艦ヲ失ヒタルヲ以テ、東郷聯合艦隊司令長官ハ、敵ノ士氣沮喪シ、暫ク出動ノ勇氣ナカルヘキヲ察シ、且ハ陸軍トノ共同作戰モ、遠カラス開始セラルヘキヲ思ヒ、此ノ機ニ乘シ、艦隊ノ一部ヲシテ、浦鹽斯德方面ニ作戰セシメ、以テ遼東方面ニ集中セントスル敵ノ陸軍ヲ牽制セント欲シ、十六日海州邑ニ入港セシ後、上村第二艦隊司令長官ニ、左ノ訓令ヲ與ヘタリ、

- 一、情報其ノ他ヲ綜合スルニ旅順ノ敵ハ大打撃ヲ受ケタルモノ、如ク當分出動ノ氣力アラサルヘシ
- 二、貴官ハ目下遼東方面ニ集中ノ形跡アル敵ノ陸軍ヲ浦鹽方面ニ牽制シ若シ好機アラハ浦鹽敵艦ヲ擊滅スルノ目的ヲ以テ第二艦隊(八雲及ヒ淺間ヲ)第四艦隊(和泉ヲ)第一驅逐隊第三艦隊附屬艇隊二隊日光丸金州丸ヲ率非鎮海灣ニテ炭水ヲ補充シタル後急速浦鹽方面ニ向ヒ作戰行動スヘシ但炭水補充ノ爲メ尙嚴島丸ヲ鎮海灣マテ隨航セシム
- 三、此ノ行動ハ可成本月盡日マテニ結了スルヲ要シ行動了レハ貴官ハ其ノ麾下ト共ニ佐世保若クハ竹敷ニ在リテ出航ノ準備ヲ完整シ待命スヘシ

四、日光丸ニハ臨時小田艦隊附屬敷設隊司令及ヒ同隊員三名ヲ乘組マシム

五、竹敷ニ在ル第三艦隊ノ諸隊ハ不日當方面ニ北上セシムル豫定ナリ(聯隊機密第(二九九號)

之ト同時ニ、竹敷ニ在ル片岡第三艦隊司令長官ニ向ヒ、和泉及ヒ二艇隊ヲ鎮海灣ニ回航セシメ、上村第二艦隊司令長官ノ指揮下ニ入ラシムヘキヲ命セリ、

是ニ於テ上村第二艦隊司令長官ハ、同日午後六時、第二艦隊出雲(上村司令)吾妻、春日、常磐、磐手(第二艦隊司令官海軍)通報艦千早、第四艦隊浪速(第二艦隊司令官海軍)高千穂對馬、新高(和泉少將三須宗太郎旗艦)第一驅逐隊白雲(司令官海軍大佐淺)三艦隊ニ屬シ、第一驅逐隊白雲(司令官海軍大佐淺)霞、朝潮、曉、水雷母艦日光丸、艦隊附屬運送船金州丸ヲ率非テ海州邑ヲ拔錨シ、鎮海灣ニ向ヒ、(艦隊用運送船嚴島丸)東郷聯合艦隊司令長官ハ、

其ノ大要ヲ大本營ニ打電セリ、尋テ十八日、第二艦隊以下ハ鎮海灣ニ入り、(第四艦隊中ノ新高オンニ大ナル龜裂ヲ生シタルヲ發見シタルヲ以テ上村司令長官ハ同艦ニ向ヒ佐世保ニ回航シ豫備錨ヲ搭載シ且炭水ヲ補充シタル後チ鎮海灣ニ至ルヘキヲ命シ同艦ハ之ヲ了リテ二十日ノ早朝鎮海灣ニ)各艦直ニ炭水ノ補充ヲ爲シ、又竹敷ニ在ル片岡第三艦隊司令長官ハ、和泉及ヒ第十一、第十五艇隊ニ鎮海灣回航ヲ命シ、和泉ハ十八日第二艦隊以下ニ先チテ入港シ、第十一艇隊タル第七十三號(司令官海軍少佐武)第七十五號、第七十二號、第七十四號、第十五艇隊タル雲雀(司令官海軍)

中佐笠岡鷲ハ、十九日ノ早朝入港シ、上村司令長官ノ指揮下ニ屬シ、尙同日午前一時伊集院海軍軍令部次長ヨリ、浦鹽斯德ニ關スル情報(此ノ情報ハ同月十六日元山津ヨリ東京朝日新聞社ニ入ヨリ一名順川郡ヨリ一名韓人歸リ來レリ其ノ談話ヲ綜合スレハ浦鹽ハ過日ノ砲撃ニテ或砲臺ニ多少ノ損害ヲ受ケタリ士氣一般ニ沮喪シ居民堵ニ安セシテ其ノ三分ノ二ハ已ニ逃亡セリ軍務知事ハ日本軍來リ攻メ抗敵スル能ハサルトキハ市街ヲ燒キ拂ヒテ滿洲ニ退却シ一物ヲモ敵手ニ委スヘカラスト訓令セリ四隻ノ軍艦畫問港外ニ出ツルモ夜間ハ必ス港内ニ在リ彼等唯一ノ頼ミ

トスルハ砲臺ニテ日本艦隊ヨリ砲撃セラレシ砲臺ニハ朝鮮人ヲ督シテ鹿砦ヲ設ケシメ居レリ尤糧食ハ未タ乏シカラス物價ハ二割方ノ騰貴ニ過キズ兵數ハ開戦前ニ比シ増加ノ模様ナシ國境ハキイウスクニ在ル兵數モ千名ニ足ラス唯若アリ、乃チ上村司令長官ハ、愈翌二十日ノ午後ヲ以テ、浦鹽斯德ニ向ヒ、行動ヲ開始セントセシカ、同港ニ直航スルトキハ、長途ノ航海トナリテ、驅逐隊、艇隊ハ、途中炭水ノ補給ヲ要シ、加之同方面潮流ノ狀況ハ、不明ナルヲ以テ若シ異常ナル天候ニ遭遇セル等ノ際ニハ、艦位ヲシテ不明瞭ナラシムルノ恐アルノミナラス、小艦及ヒ艇隊等ヲ避難セシムルニモ、稍不安ノ慮アリトナシ、先ツ元山津ニ寄港シ、炭水ヲ補給シ、新情報ノ有無ヲ探查シ、尙天候ヲ見定メタル後チ、更ニ浦鹽斯德ニ向フコトニ決シ、即日左ノ命令ヲ發セリ、

- 一、浦鹽方面ノ敵ニ關シテハ近來確報ニ接セサルモ最近ノ情報ニ據レハ晝間ハ時々出港スルモ夜間ハ常ニ港内ニ在ルモノ、如シ
  - 二、本艦隊ハ目下遼東方面ニ集中ノ形跡アル敵ノ陸軍ヲ浦鹽港方面ニ牽制シ且好機アラハ同港ノ敵艦ヲ撃滅スルノ任務ヲ有ス
  - 三、本艦隊ハ明二十日午後三時出港シ元山津ニ向フ航行ノ序列左ノ如シ
- 
- 四、本艦隊ハ元山津ニ於テ炭水ノ補充ヲナシ浦鹽方面ニ向ヒ行動ヲ開始セントス

五、本行動中我カ中央標準時ヲ使用ス

艦隊編制

主隊

第二戰隊

- 1 出雲
- 2 吾妻
- 3 春日
- 4 常磐
- 5 磐手
- 6 千早
- 7 日光丸

第四戰隊

- 1 浪速
- 2 高千穂
- 3 和泉
- 4 新高
- 5 對馬

驅逐隊及ヒ艇隊

第一驅逐隊 第十一艇隊 第十五艇隊

各隊ノ編制ハ各隊司令之ヲ定ム

原速力

十節(特令ア  
ルノ外)

微速力

五節

舵角

出雲十五度

(注意) 此ノ行動中聯隊法令第三七號備考及ヒ第三十八號ヲ適用ス(乙隊機密第  
二四九號)

(編者曰ク第三十七號備考ハ無線電信略符號送受法第三十八號ハ敵ノ機械水雷ヲ發見セ、  
ル場合ニ於ル通知信號等ニシテ尙本命令ニハ浦鹽方面行動中ノ特設信號ヲ添ヘアリ以



二十日午前九時十五分、上村第二艦隊司令長官ハ、伊東海軍々令部長ニ對シ、同日午後三時出發シテ、二十二日元山津ニ寄港シ、炭水ヲ補充シタル上、浦鹽斯德ニ向ヒ行動ヲ起シ、歸途再元山津ニ寄港スヘキ豫定ナルコト、及ヒ元山寄港ノ事ハ、極テ秘密トナス様、取計ヲハレタキコトヲ打電シ、第二艦隊ヲ率非テ、午後三時鎮海灣ヲ出發セリ、(又第三艦隊ハ東郷聯合艦隊司令長官ノ命ニ依リ十九日海州邑錨地ニ向ケ竹敷ヲ出ス)是ヨリ先キ、十六日午後八時十分伊東海軍々令部長ハ、東郷聯合艦隊司令長官ヨリ、第二艦隊以下、浦鹽斯德方面ニ對シ作戰スルカ爲メ、海州邑ヲ出發セルノ報ニ接シ、尋テ上村第二艦隊司令長官ヨリ、十八日午後二時三十五分鎮海灣入港ノ報アリタルヲ以テ、直ニ伊集院海軍々令部次長ヲシテ、前記ノ浦鹽斯德ニ關スル情報ヲ打電セシメ、二十日午前十一時四十七分、更ニ上村司令長官ヨリ、元山ニ寄港ノ事、及ヒ同伴ヲ秘密トナス様取計ヲハレタキ旨ノ電報到達セシヲ以テ、同部長ハ、直ニ外務省ニ依頼シ、大木元山副領事ニ宛テ、我カ艦隊ノ一部、不日其ノ港ニ入港スヘク、其ノ行動ニ關シテハ、嚴ニ秘密ヲ保ツノ必要アルニ付、豫メ之ニ對スル電信取締等ノ方法ヲ講シ、臨機處置アリタシ、ト電報セリ、既ニシテ二十二日午前四時三十分第二艦隊ハ、元山津附近ニ達シ、上村司令長官ハ、千早ヲシテ同港ニ先入セシメ、將校ヲ領事館ニ派シテ、嚴密ノ監督ヲ電報ノ發送ニ加フル様、依頼スヘキヲ命シ、出雲以下ハ、午前九時十五分入港ス、幾モナク大木副領事同長官ヲ訪問シ、同地方ノ平穩ナルコト、同月中旬ヨリ、敵ノ騎兵若干鏡城、雄基灣、

會寧、城津等ニ出沒シ、就中十九日頃、二百五十ノ露兵ハ、吉州ヨリ北青ニ向ヒ出發スルノ風説アリ、トノ報告ニ接セルコトヲ告ク、尋テ高木陸軍守備隊長(元山ノ守備ハ三十七年三月九日以來歩シカ同二十四日ニ至リ後備歩兵第四十二聯隊第四中隊モ増派セラレテ高木少佐ノ指揮ニ屬セリ)モ、同長官ヲ訪問シ、上村司令長官ハ、之ト協議ノ結果、第十一艇隊ハ、同港ニ留リ、同隊長ノ協議ニ應シ、便宜城津以南諸港灣ノ威嚇運動ヲ行フヘキコト、同港ニ殘留ノ豫定ナル運送船金州丸モ、便宜其ノ目的ニ使用シ得ルコトニ定メ、一面ニハ、艦艇ニ炭水ヲ補給シ、第一驅逐隊及ヒ第十五艇隊ニ、機械水雷ヲ裝置セシメ、同夜ハ哨兵ヲ配シ、防禦網ヲ張り、第十一艇隊中ノ二隻ヲ麗島附近ノ水道ニ置キ、以テ嚴重ナル警戒ヲ爲シ、又左ノ命令ヲ發セリ、

一、敵情ニ關シテハ前命令記載ノ外一モ得ル所ナシ

二、當艦隊(金州丸及ヒ第十艇隊ヲ缺ク)ハ豫定ノ任務ヲ遂行スル爲メ、明二十三日午前九時出港シ浦鹽斯港外D地點(編者曰ク北緯四十二度二十分東經百三十二度十分即チ六〇八地點ナリ)ニ向フ航行序列前ノ如シ但D地點到着ヲ

午後六時ト豫定ス

三、當艦隊D地點到着後ハ別紙行動要領ニ據リ行動セントス

四、天候ノ爲メ艦隊分離シタル場合ニ於テハ左記ノ集合地點ニ於テ相會スルモノトス

(イ) B地點(編者曰ク北緯四十度四十分東經百三十三度即チブルアツト崎沖二一二地點ナリ)及ヒ其ノ以南ニ於テ分離シタルトキ

S地點(浦新)

(ロ) B地點以北ニ於テ分離シタルトキ

C 地點(亞米利)編者曰ク北緯四十二度二十分東經(加灣沖)百三十三度即チ八二一地點ナリ

但C地點ニテ待合セ難キトキハA地點(亞米利)加灣

艦隊第一回及ヒ第二回行動中分離シタルトキ亦同シ

(ハ) 天候ノ爲メ驅逐隊艇隊ヲ避難セシメタルトキハ千早及ヒ日光丸ハ令ナクシテ之ト同行スヘシ但千早ハ無線電信ヲ以テ主隊ト通信連絡ヲ保持スルコトヲ努ムヘシ

五、各艦艇ハD地點到着以前便宜總離ニ點火シ常ニ全速力ニ對スル汽力ヲ保チ不時ノ使用ニ差支ナカラシムヘシ

六、當艦隊浦鹽港ニ對スル行動ヲ了リタルトキハ歸途沿岸諸港ノ威嚇運動ヲ試ミ元山津ニ寄港シ炭水ヲ補充ス(乙隊機密第(二五二號))

(別紙)

行動要領(編者曰ク本要領ニ添附セル圖四葉ハ附圖ニ掲グルルヲ以テ參照スヘシ)

第一回(D地點到着ノ時ヨリ開始ス)

一、主隊ハ午後六時D地點ヲ發シ南東ニ變針シ午後十時北東ニ正子北西ニ變針シ午前五時アスコルド燈臺ノ南西ニ達シ浦鹽港東口ニ向ヒ威嚇運動ヲ行フ

二、驅逐隊艇隊ハ旗信ニ依リD地點ヲ發シ浦鹽港ノ東口ニ進ミ防禦ニ關スル偵察ヲナシ敵艇ノ警戒シ居ルヲ發見セハ之ヲ撃沈シ翌日天明後主隊ニ復歸スヘシ

此ノ夜事宜ニ依リ驅逐隊艇隊ヲシテスクリプレツフ島ノ北東(編者曰ク後チ實行ノ結果ニ依レハ北東ハ南東ノ誤ニア

ラサ)ニ機械水雷ヲ沈置セシムルコトアルヘシ

第二回(D地點到着ノ翌日ヨリ第一回行動ニ續イテ施行ス)

一、主隊ハ午後二時アスコルド島ノ西方ヨリ針路ヲ南西微南ニ採リ午後十時南東微東ニ變針シ同十一時北東微北ニ變針シ翌午前六時アスコルド燈臺ノ南西ニ達シ浦鹽港東口ニ向ヒ第二回ノ威嚇運動ヲナス

二、驅逐隊艇隊ハアスコルド島附近ニ留リ終夜警戒ニ從事シ機ヲ見テ東口ニ現レ敵情ヲ偵察シ敵ノ艦艇ヲ發見セハ之ヲ攻撃破壊シ翌日天明後主隊ニ復歸スヘシ

此ノ第一第二回行動中春日ヲシテ間接射撃ヲ施行セシメ高千穂和泉及ヒ日光丸ヲシテ別圖記載ノ概位置ニ機械水雷ヲ沈置セシムルコトアルヘシ

機械水雷ノ沈置ハ時機ヲ看旗信ヲ以テ之ヲ命スヘシト雖モ成ルヘク主隊ノ第一回威嚇運動ヲ開始スルニ際シ之ヲ實行センコトヲ期ス此ノ場合ニ於テハB旗ヲ旗艦ノ檣頭若クハ「ヤーダーム」ニ掲クルモノトス右ノ三艦及ヒ驅逐隊艇隊ハ直ニ列ヲ離レ豫定ノ位置ニ水雷ヲ沈置シ急航本隊ニ復歸スヘシ

但各艦ハ出來得ル限り其ノ布設位置ヲ精測シ之ヲ報スヘシ  
右布設中千早ハ令ナクシテ附圖記載ノ位置ヲ取り主隊トノ通信連絡ヲ保持スヘシ日光丸水雷布設ニ從事スルトキハ春日ヲシテナジモフ砲臺ニ對シ掩護射撃ヲ行ハシムルコトアルヘシ

此ノ行動中時機ヲ見日光丸ヲシテ艇隊ニ炭水ノ補給ヲナサシム

第三回 (D地點到着ノ翌々日ヨリ第  
二回行動ニ續イテ施行ス)

主隊ハ驅逐艇隊ヲ率非午後二時頃アスコルド島ノ西方ヨリ前同針路(西南)ヲ採リ  
午後十一時北西微西ニ正子北二分ノ一西ニ變針シ翌朝ボシエツト灣沖ニ達シ同灣ニ對シ  
威嚇運動ヲ行フ

是ト同時ニ上村司令長官ハ、第十一艇隊司令海軍少佐武部岸郎ニハ、元山津ヲ根據トシ、陸軍降  
時派遣隊長ト協議シ、便宜城津以南諸港灣ノ威嚇運動ヲ行ヒ、四月二十八日以後ハ、元山津ニ在  
リテ艦隊ノ來著ヲ待ツヘキコトヲ、又金州丸監督將校海軍少佐溝口武五郎ニハ、同船ヲ元山津  
ニ在泊セシメ、必要ニ應シ、艇隊ニ炭水ヲ補充シ、艦隊ノ歸著ヲ待ツヘキコトヲ訓令シ、尙兩少  
佐ニ、高木派遣隊長ト協議ノ結果必要アラハ、金州丸ヲ使用スルモ差支ナキ旨ヲ口達シ、尋テ二  
十三日午前六時三十分、伊東海軍々令部長ニ向ヒ、左ノ電報ヲ發セリ、

今二十三日午前九時出港シ浦鹽斯德ニ向ヒ行動ヲ開始ス二十八日再元山津寄港ノ豫定第十  
一艇隊及ヒ金州丸ハ元山津ニ在泊セシメ同艇隊ハ時々城津附近迄ノ間沿岸威嚇運動ヲ爲サ  
シム

斯テ九時豫定ノ如ク艦隊ヲ率非テ元山津ヲ發シ、北緯四十二度二十分、東經百三十二度十分(D  
點)ニ向ヒ、十海里ノ速力ヲ以テ、左ノ航行序列ヲ取リ、進航セリ、

- 出雲 吾妻 春日 常磐 磐手
- 浪速 高千穂 和泉 新高 對馬 日光丸

千早

第一驅逐隊

第十五艇隊

然ルニ元山津港内ニ在リテハ、天氣晴和ナリシモ、港口ヲ出ツルニ及ヒテ、遙ニ水平線一面霧ニ  
覆ハル、ヲ望見シ、十一時五分頃ヨリ、濃霧ニ會シタルヲ以テ、或ハ汽笛ヲ鳴ラシ、或ハ霧中標的  
ヲ曳キ、或ハ針路ヲ變スル際ノ規約ヲ定ムル等、嚴密ナル警戒ヲ加ヘ、夜ニ入りテヨリ、屢探海燈  
ヲ點シ、二十四日朝ニ至リシニ、浪速ハ午前八時半頃ヨリ十時頃迄、異様ノ無線電信ヲ感セリト  
云フ、而テ上村司令長官ハ、霧ノ霽間ヲ見テ、驅逐隊、艇隊ニ向ヒ、同日午後D地點著後ノ行動ニ  
關シ、左ノ訓令ヲ與ヘタリ、是蓋濃霧ニ會スルコトアルヘキヲ慮リタレハナリ、

驅逐隊艇隊ハ本隊ニ近ツキ喇叭到達距離ヲ航行セヨ若シ旗艦ニテ空砲一發シ整合譜ヲ吹カ  
ハ本隊ハ針路ヲ南東ニ變ス其ノ隊ハ之ニ關セス其ノ儘直進シ出來得ヘクシハ豫定ノ行動ヲ  
起セ若シ霧ノ爲メ出來サレハ霧ノ霽ル、ヲ待チ天明ノ後アスコルド島附近ニテ本隊ニ歸シ  
千早ハ列ノ後方ニ列セシム

同時千早ヲシテ、位置ヲ列ノ後方ニ取り、日光丸ト連絡ヲ保持シツ、行進セシメ、又總艦ニ對シ  
テハ、霧中針路ヲ南東ニ變シタル後豫定行動ニ就キ、翌朝アスコルド島附近ニ行クヘキコトヲ  
命シ、尋テ旗艦ノ外、已ムヲ得サル場合ニ非ツレハ、無線電信ヲ使用スヘカラサルコトヲ令シ、午  
後四時頃、推測ニテハ既ニD地點ニ達シタルモ、引續キ濃霧霽レサルカ爲メ、上村司令長官ハ、豫  
定行動ヲ延期シ、艦隊ヲ分離セスシテ、一旦南方ニ引返スニ若カストナシ、前命令ヲ取消シ、同三  
十分針路ヲ南ニ轉シ、以テ二十五日朝、北緯四十度五十分、東經百三十二度二十分(D點)附近

ニ至リシモ、依然トシテ四邊濃霧ニ鎖サレ、豫定行動ヲ遂行スルニ適セサルヲ以テ、同司令長官ハ、一應元山津ニ寄港シ、炭水ヲ補充シ、天候ノ定ルヲ待チテ、行動ヲ再興スルニ決シ、午前九時五十五分ヨリ南七十七度西ニ變針シ、速力ヲ加減シ、辛ウシテ二十六日午前九時四十七分、謁島及ヒ麗島ヲ認メ、尋テ十時二十分、元山港外ニ近ツキタルヲ以テ、驅逐隊艇隊ヲ便宜入港セシメ、艦隊ハ午後零時三十九分、葛麻半島附近ヲ通過セシニ、偶先著セル第一驅逐隊ノ朝潮港内ヨリ出テ、其ノ附近ニ到リ、港口水雷敷設ノ恐アリ、トノ信號ヲ爲セリ、是ニ於テ上村司令長官ハ、艦隊ノ入港ヲ止メ、西方ニ進ミテ港外ニ投錨セリ、蓋朝潮ハ、入港スルト同時ニ領事館ヨリ、前日露國艦隊三隻元山津ヲ襲ヒ、港口附近ニ機械水雷ヲ沈置セルヤノ疑アリ、トノ報ニ接シタルヲ以テ、之ヲ急報セルモノナリ、

是ヨリ先キ艦隊出發後、元山津ニテハ、二十五日午前六時、第十一艇隊ハ、陸兵一中隊ヲ載セタル金州丸ヲ掩護シテ、利源ニ向ヒ出發セシカ、(本章第三節金州丸) 避難顛末ニ詳ナリ 尋テ十一時頃、露國水雷艇二隻突然同港ニ闖入シ、偶在泊セル汽船五洋丸(大阪八洲力太郎ノ所有船ニシテ總噸數六) 二向ヒ、各一隻ノ端舟ヲ派シ、數名ノ兵員同船内ヲ搜索シ、船長ノ不在ヲ確メタル後、直ニ總乘組員ニ退船ヲ迫リ、其ノ争ツテ小船ニ乗シ、本船ヲ離ル、ヲ見ルヤ、魚形水雷ヲ發射シ、午後零時三十分、之ヲ撃沈シ、港ヲ出テ、其ノ際葛麻浦ト薪島トノ間ニ在リシ浦鹽斯德艦隊「グロモボイ」ロシ「ヤ」ヨリユーリクニ合シ、四時頃北方ニ向ヒ航去セリ、而テ敵ノ水雷艇入港スルト同時ニ、高木守備隊長ハ、直ニ帝國領事館ノ東南約四百米突ノ空地ニ、警急集合ヲ行ヒ、大木副領事ハ、敵狀

ヲ在京城特命全權公使林權助ニ電報シ、(爾後屢狀況ヲ電報シ尋テ高木臨時派遣隊長ノ請求ニ依金州丸ノ出發ヲ知リ居リタルヲ以テ大木副領事ニ出來得) 林公使ハ、更ニ我カ外務省ニ轉電シ、クハ出先キノ同水雷艇等ニ右事態ヲ報告スヘキヲ命セリ、又元山電信局長モ、遞信省ニ電報シ、兩省ヨリ大木營ニ通知アリタルヲ以テ、伊東海軍々令部長ハ、午後四時三十分大木副領事ニ向ヒ、敵ノ軍艦水雷艇出テ去リタルトキ、又ハ異狀アルトキハ、直ニ電報アリタシ、ト發電シ、幾モナク續々之ニ關スル電報到達セルヲ以テ、同部長ハ、八時十五分同副領事ニ向ヒ、「ロシトヤ」グロモボイ及ヒ他一隻ノ露國軍艦ト、水雷艇二隻ト、二十五日午前元山ニ來港シ、汽船五洋丸ヲ撃沈セリ、トノ確報アリタルヲ以テ、爲シ得ハ速ニ此ノコトヲ上村司令長官ニ傳フヘキ旨、城津方面ニ在ル帝國海軍艦船ニ傳達セラレシコトヲ依頼シ、京城帝國公使館附武官海軍少佐吉田増次郎ニモ、亦之ヲ命セリ、此ノ時同領事ハ、既ニ第十一艇隊ニ通知ノ手段ヲ盡シ、尙高木守備隊長モ、其ノ狀況ヲ派遣中隊及ヒ第十一艇隊ニ通知セシカ爲メ、北青及ヒ端川電信局ニ電報シ、又軍司令官ノ命令ニ依リ、小蒸氣船ヲ新浦及ヒ利源ニ向ケ差遣セシカ、(然レトモ結局同艇隊ニハ通報達セズ又小蒸氣船ハ船) 二十六日午後、第二艦隊歸著セルヲ以テ、大木副領事ハ、直ニ館員ヲ旗艦出雲ニ派シテ、上村司令長官ニ敵ノ闖入及ヒ陸兵派遣ノコトヲ告ケ、尙伊集院海軍々令部次長ヨリモ同長官ニ向ヒ、敵狀ヲ通知セルノ電報(前記副領事ノモト同様) 到達セルヲ以テ、同司令長官ハ遺憾ニ堪ヘズ、直ニ第十一艇隊及ヒ金州丸ノ搜索ヲ兼ネ、急速浦鹽斯德港方面ニ向進シテ、敵ヲ扼セント欲シ、午後一時五十五分、第二戰隊及ヒ驅逐隊ニ、出港準備ヲ命セシカ、幾モナク第十一艇隊歸著シ、武部司令ハ、同司令長官ニ行動ヲ報告

セリ、其ノ大要左ノ如シ、

第十一艇隊ハ陸兵一個中隊ヲ載セタル金州丸ヲ掩護シ示威ノ目的ヲ以テ利源ニ上陸セシメシカ爲メ昨二十五日午前六時出發シ午後二時無事同泊地ニ達シ中隊ハ上陸ノ目的ヲ達シ再乗船ノ上午後六時同泊地ヲ出發シ共ニ元山津ニ向フ然ルニ利源碇泊中長濤漸次港内ニ入り來リ艇ノ動搖甚シク且午後三時晴雨計三十吋ナルモノ午後四時三十分迄ニ急ニ降下シテ二十九時九トナレリ仍テ天候ノ不穩ヲ豫想シ同艇隊ハ遮湖ニ入り碇泊シ金州丸ハ單獨元山津ニ向ヘリ同艇隊ハ遮湖ニ一泊シ今茲ニ歸港セリ

而テ武部司令ハ露艦元山津ニ現レタルコト及ヒ金州丸ノ安否ニ關シテハ更ニ知ル所アラス、是ニ於テ上村司令長官ハ、即時之ニ向ヒ、金州丸搜索ノ爲メ出港ヲ命シ、(同四時三十)尙千早ヲシテ港外ヲ警戒セシメシカ、同司令長官ハ、既得ノ情報ヲ綜合シ、敵ハ元山ヲ急襲シタル後、浦鹽ニ歸港セルモノナルベキヲ以テ、之ヲ追躡スルモ及フ能ハサルヘシトナシ、出發ヲ延期シ、更ニ翌二十七日朝ヨリ、全艦隊ヲ率非テ出港シ、海岸ニ接近シ、新浦沖ニ航シテ、金州丸ヲ搜索シタル後、北緯四十二度二十分、東經百三十二度十分(點)ノ地點ニ向ヒ、豫定行動ヲ取ラント決心シ、夕刻ヨリ錨地ヲ松田灣ニ移シ、警戒ヲ嚴ニセリ、既ニシテ夜ニ入り、同司令長官ハ、大木副領事ヨリ、北青ノ沿岸新昌ニ出シアル諜者(本邦)ヨリ、二十五日午後六時、煙突一本、橋二本ノ水雷艇五隻北方ヲ通過ス、トノ情報ヲ受ケタル旨ノ通知ニ接シ、直ニ同副領事ニ向ヒ、第十一艇隊歸港セハ、其ノ儘留リテ警戒ノ任務ニ服シ、運炭船到着セハ、便宜石炭ヲ満載シ置クヘシ、トノ訓

令ヲ交付スヘキヲ依頼シ、又佐世保鎮守府司令長官海軍中將鮫島員規ニハ、石炭船二三隻ノ回送ヲ要求シ、伊東海軍々令部長ニハ、左ノ電報ヲ發セリ、

二十三日元山津出港後二十三地點ヨリ濃霧ニ會シ之ヲ冒シテ航進セリ北上スルニ從ヒ益濃厚トナリ二十四日午後四時推測ニテハ六四六地點附近ニ達シタルモ四面濃霧ニ覆ハレ何等行動ヲ爲ス能ハサルヲ以テ午後四時三十分正南ニ轉針シ二十五日午前六時六七三地點附近ニ到達セシモ霧ハ依然濃厚ニシテ再引返スモ到底浦鹽斯德ニ接近シ行動シ得ルノ見込ナキヲ以テ一時元山津ニ歸港スルニ決シ今二十六日朝迄約三晝夜全ク濃霧ニ閉塞セラレ時ニ艦隊ノ一部ヲ望見シ得タルコトアリシカ多クハ後續艦スラ見ルヲ得サリシ状態ナリシモ遂ニ一艦艇ヲも見失フコトナク艦隊全部辛ウシテ午後一時當港ニ歸著セリ入港スルヤ否ヤ直ニ領事來艦シ其ノ報告ニ依レハ二十五日正午頃敵ノ水雷艇二隻元山津ニ進入シ我カ商船五洋丸ヲ擊沈シ退却セリ此ノ時港口ニハ「ロシーヤ」「グロモボイ」「リユーリク」ト認ムル敵艦三隻アリ午後二時頃北東ニ向ヒテ退去セリト又二十五日午前六時頃金州丸ハ陸軍守備隊一個中隊ヲ載セ第十一艇隊ト共ニ利源縣方面ニ向ヒ北行セリト云フ依テ或ハ敵艦隊ニ會セシヤノ疑アルヲ以テ第二戰隊及ヒ驅逐隊ヲ率非直ニ出港シ敵艦隊ヲ追尾セントシ出港準備整ヒタルトキ第十一艇隊ノミ歸港セリ同司令ノ報告ニ依レハ二十五日午後二時利源縣ニ著シ直ニ陸軍兵ヲ上陸セシメ陸上偵察濟ミ午後九時之ヲ收容シ金州丸ノミ單獨元山津ニ歸航ヲ命シ同船ノ出發ヲ認メ水雷艇隊ハ天氣惡シキカ爲メ遮湖津ニ假泊シ今朝六時同所ヲ發シ歸港

セリト云フ水雷艇隊ハ敵艦及ヒ水雷艇ニ關スルコトハ更ニ知ラス然ルニ金州丸ハ只今ニ至ルモ歸港セス敵艦隊ニ會セシヤ又ハ濃霧ノ爲メ歸港セサルヤ不明ニ付直ニ第十一艇隊ヲ搜索ニ出セリ

本職ハ明二十七日午前七時出發シ再豫定計畫ニ依リ行動セントス第十一艇隊ハ當地ニ留メ置ク

佐世保鎮守府司令長官ヘハ石炭船二三隻元山津ニ至急回送ヲ要求シ置ケリ

翌二十七日、上村司令長官ハ、濃霧ニ遭遇セル際取ルヘキ行動ヲ定メ、麾下ニ向ヒ、左ノ命令ヲ與ヘタリ、

一、驅逐隊艇隊浦鹽灣口ニ向ヒ行動ヲ起シタル場合ニ於テ翌朝艦隊ニ合スルコト能ハサルトキハ直ニ松田灣ニ歸ルヘシ

二、高千穂和泉及ヒ日光丸布設事業ニカ、ル爲メ行動ヲ起シタル後チ霧ニ遭ヒ主隊ヲ見失

ハ、諸艦艇ハ主隊ニ合スルヲ求メス適宜迂航路ヲ取り各群單獨ニ航行シ松田灣ニ歸ルヘシ

三、諸艦艇主隊ヲ見失ヒタル場合ニハ其ノ地點ノ孰レナルヲ問ハス松田灣ニ歸ルコト、定メC及ヒS地點集合ノ件ヲ廢ス

四、艦隊北進中濃霧ニ遭ヒ行動ヲ續行シ難シト認メタル場合ニハ再舉ヲ期シ行動ヲ中止シ松田灣ニ歸ル豫定

既ニシテ午前九時、艦隊ハ豫定ノ如ク、新浦沖ヲ經テD地點ニ向ハントシ、元山津ヲ拔錨セシニ、灣口ヲ出ツル際、第十一艇隊ノ歸港スルニ會シ、武部同艇隊司令ハ、上村司令長官ニ向ヒ、前夜午後十一時新浦ニ達シ、馬養水道ヲ通過シテ、港内ヲ搜索シタルニ、敵アラサリシヲ以テ、二十七日午前三時、港外ニ出テ、東航セントセシモ、波浪高クシテ、戦闘動作ニ適セサルヲ認メタルヲ以テ、乃チ歸途ニ就ケルコト、及ヒ金州丸ヲ發見セサリシコト等ヲ報告セリ、是ニ於テ同司令長官ハ、更ニ同艇隊ニ命スルニ、再金州丸ノ安否ニ關シ、利源附近マテ充分ニ搜索シ、其ノ結果ヲ大本營ニ電報シ、艦隊ノ歸著ヲ待ツヘキヲ以テシ、同艇隊ハ直ニ之ニ趨キ、(別冊附圖第十參照)艦隊ハ港外ニテ警備中ノ千早ヲ合セ、之ヲシテ速力ヲ増加シ、新昌灣ニ先著シテ其ノ附近ニ於ル金州丸ノ有無ヲ確メシメ、艦隊モ亦同灣ニ向ヒテ航行中、午後一時二十分千早ヨリ馬養島ノ南約五海里附近ニ於テ、船室扉ノ破片ト思ハル、モノ、及ヒ石炭積ニ要スル木製ノ樋ノ如キモノ、浮流シ居ルヲ見タルモ、收拾スルノ機ヲ失シタルハ、諸艦ニ注意ヲ乞フ、トノ電報ニ接シ、幾モナク春日及ヒ霞ハ、船具ト覺シキモノ、浮流セルヲ見、霞ハ之ヲ收拾シ、木扉一枚ヲ得タリ、既ニシテ四時、千早ハ任務ヲ了ヘテ復隊シ、新昌ヨリ利源マテ搜索セシモ、金州丸ヲ發見セサリシコトヲ報ス、尋テ五時四十五分、浪速、曉等、漂流船ヲ認メ、曉ハ北緯四十度五分、東經百二十八度五十五分ノ推測位置ニテ之ヲ檢セシニ、鼠色ニ塗リタル傳馬船ニシテ、内ニ三十五年式海軍銃劍一口、帶革一個、靴二足(一足ハ士官用ノ如ク一足ハ海軍官給ノモノナリ)及ヒ金州丸監督將校ノ日誌ト思ハルルモノ一冊アリシニヨリ、之ヲ收容シ、其ノ由ヲ上村司令長官ニ報告セルヲ以テ、同司令長官ハ、

金州丸ノ正ニ敵ニ遭遇シタルヲ察シ、且敵ニ抗シタル上、沈没セシメラレタルカ、或ハ逃レテ摺岸シタルカ、二者其ノ一ナルヘキコト、多クノ乗員ハ、陸上ニ逃レ得タルカノ疑アルコト、摺岸セリトセハ、遮湖以北ナルヘキコト等ヲ推斷シ、又金州丸ノ書類、萬一敵手ニ落チタルモノアルヘキカヲ慮リ、翌夜ニ於ル艦隊ノ行動ヲ改メ、D地點ヨリ六時間南方ニ航シ、轉シテ一時間東ニ航シ、其ヨリ北ニ向ヒテ翌朝ニ至ルコト、D地點以後ハ、日光丸ヲ警手ノ後ニ、千早ヲ對馬ノ後ニ附スルコト、水雷敷設位置ハ、日光丸ハシコタ島ノ南端ヨリ東微南四分ノ一南約七海里、和泉ハリコルド島ノ東端ヨリ東方約二海里、高千穂ハ赤崖島ノ東端ヲ東方ニ距ル約三海里半トスルコトニ定メシカ、幾モナク千早艦長海軍中佐福井正義ニ向ヒ、翌朝迄沖ニ留リ、早朝ブルアット崎ニ近ツキ、海岸ヲ搜リツ、南下シテ元山ニ歸リ、其ノ結果ヲ大本營ニ報告スヘキヲ命シ、尙艦隊ハ二十九日午後元山ニ向ヒ、浦鹽方面ヲ發スヘキ豫定ナルコトヲ通知シテ、之ト別レタリ、

二十八日、對馬左舷機復水器ニ故障アリタルヲ以テ、上村司令長官ハ、同艦ヲシテ修理ノ爲メ、佐世保ニ回航セシメ、(瓜生司令官ハ浪速、新高ヲ第一小隊)日光丸ヲシテ、第十五艇隊ニ石炭ヲ補充セシメ、艦隊ハ速力ヲ加減シテ、午後五時烏蘇里灣ノ南方ナルD地點ニ達セシヲ以テ、同司令長官ハ、第一驅逐隊、第十五艇隊ニ水雷沈置ヲ命シ、諸艦登舷禮式ヲ以テ、之ヲ送リテ相分レ、艦隊ハ速力ヲ減シ、豫定ノ如ク南ニ航シ、更ニ東ヨリ北ニ變シ、(航行中濃霧ニ會セシ)二十九日午前五時ヨリ漸次速力ヲ増加シ、六時アスコルド島附近ニ達セシニ、スクリプレツフ島ノ南方、

一海里ノ處ニ、十二箇ノ水雷沈置(別冊附圖及ヒ第五部第四篇第六)ヲ了リテ歸著セル驅逐隊、艇隊ニ會シタルヲ以テ、之ヲ艦隊ノ右方ニ占位セシメ、七時三十五分更ニ日光丸ヲシテ、列ヲ離レテ豫定地點ニ水雷ヲ沈置セシメ、驅逐隊、艇隊ハ掩護ノ任ニ當リ、九時十九分日光丸ハ三十九箇ノ水雷沈置ヲ了セリ、(別冊附圖及ヒ第五部第四篇第六)此ノ間、艦隊ハ單縦列ニテ日光丸敷設線ニ近ツキ、更ニ正面ヲ左方ニ變セシニ、同三十七分浪速ハ敵ノ浮流水雷ヲ發見セシヲ以テ、上村司令長官ハ、南方ニ變針シ、敵ノ敷設水雷ヲ慮リ、且天候モ遠望ニ適セサルヲ以テ、春日ノ間接射撃ヲ行ハス、又和泉ノ水雷敷設豫定線モ、同様ノ恐アルヲ以テ、之ヲモ止メ、高千穂ノミヲシテ、敷設位置ニ向ハシメ、驅逐隊、艇隊ノ力掩護ノ任ニ當リ、午後零時三十分高千穂ハ二十四箇ノ水雷沈置ヲ了レリ、(別冊附圖及ヒ第五部第四篇第六)然ルニ風波稍高クナリタルヲ以テ、上村司令長官ハ、天候ノ變スルヲ恐レ、爾後ノ行動ヲ中止シ、二時三十分ヨリ針路ヲ南西四分ノ一南ニ取リテ歸途ニ就キ、驅逐隊、艇隊ヲ風下ニ、日光丸ヲ第四戰隊ノ後方ニ位置セシメ、三十日早朝、針路ヲ南六十四度西トシ、永興灣ニ向ヒ、驅逐隊ハ先進シ、午前六時五十五分頃ヨリ九時迄ノ間ニ於テ、金州丸ノ端舟二隻、傳馬船一隻(内ニ船具、ライフジャ、ケット、水兵帽等アリ)ノ漂流セルヲ見、午後三時二十分ヨリ第四戰隊日光丸ハ前進シ、五時三十分、總艦松田灣ニ入港セリ、

初メ第二戰隊以下、再浦鹽斯德方面ニ向ヒテ出港スルヤ、副領事及ヒ郵便局長ハ、我カ艦隊ノ行動ヲ、所屬大臣或ハ林公使ニ電報セルヲ以テ、伊東海軍々令部長ハ、軍機漏洩ヲ慮リ、二十七日大木副領事ニ向ヒ、我カ艦隊ノ行動ハ、極テ祕密ニセサレハ、作戰上非常ノ不利ヲ來シ、特ニ其ノ

發動時日ノ如キハ、最秘密ヲ要スルヲ以テ、外務大臣及ヒ公使ニサヘモ通報セラレサルヤウ致シタシ、ト電報シ、尙二十八日ニハ、元山郵便局長ニモ同様(外務大臣及ヒ公使ニ代フ)ノ電報ヲ發シ更ニ同日外務、遞信兩大臣ニ向ヒテモ、交戦地域内ノ領事、若クハ郵便電信局長等ニ、帝國艦隊ノ行動ニ關スルコトハ、尙一層秘密ニスヘキ旨ヲ豫メ通達セラレシコトヲ照會セシヲ以テ、大木副領事等大ニ警戒シ、以テ第二戰隊以下ノ消息ヲ待チシニ、同日ブルアット岬ヨリ海岸ニ沿ツテ利源迄、金州丸ヲ搜索セシ千早入港シテ、互ニ聞知セル情報ヲ交換シ、同艦ハ翌二十九日、松田灣ニ移リ、同日利源以南ヲ搜索セシ第十一艇隊、及ヒ佐世保ヨリ回航セル運送船太郎丸、第二十六觀音丸(右二隻ハ上村司令長官ノ請求ニ基キ、鯨島佐世保鎮守府司令長官ノ命)モ入港シ、三十日ニハ、第二戰隊以下モ歸著シ、大木副領事ハ、二十八日以來金州丸ノ消息ニ接シ、其ノ露艦ノ爲メニ撃沈セラレタルノ顛末ヲ知り得タルヲ以テ、報告ニ接スル毎ニ之ヲ福井千早艦長ニ告ケ、同艦長ハ、更ニ第二戰隊以下入港スルニ及シテ、之ヲ上村司令長官ニ報告シ、同司令長官ハ、先ツ港口ノ警戒ヲ嚴ニシ、炭水ヲ補充シ、大本營及ヒ東郷聯合艦隊司令長官ニ行動ノ概略ヲ報スルト同時ニ、佐世保若クハ竹敷ニ在リテ待命スヘキ命ヲ受ケ居ルモ、敵艦隊ノ元山出現及ヒ金州丸遭難ノ爲メ、我カ居留民不安ノ念ヲ抱ケル折柄、尙豫定ノ如ク行動スヘキヤ否ヤニ就キテ、指令ヲ乞ヘリ、之ニ對シテ伊集院海軍々令部次長ハ、東郷聯合艦隊司令長官ノ命令ニ從ヒ行動セラレ差支ナシ、ト答電シ、東郷聯合艦隊司令長官ハ、竹敷ヲ本據トシ、浦鹽斯德ノ敵ニ對シ朝鮮海峽ノ安固ヲ保持スルニ努ムヘシ、ト命令セリ、是ニ於テ上村第二艦隊司令長官ハ、五月

二日午後零時三十分、第二戰隊以下ノ艦船艇ヲ率非テ、松田灣ヲ出港シ、前回ノ如キ序列ヲ以テ航行シ、四日午前九時三十分、鎮海灣ニ入港セリ、(備考文書及ヒ別冊 附圖航跡圖參照)

## 第二節 金州丸遭難顛末

元山津ニ於テハ、三月上旬以來露國ノ騎兵斥候、時々鏡城附近ニ出沒スルノ風説アリ、四月十三日ニ至リ、約五十騎同處ニ到着セルコト、(此ノ報元山ニ達シ、大木副領事ハ十四日汽船ヲ城津ニ派シ、居留民ハ十六日此ノ汽船ニテ同所ヲ撤去セリ)十六日ニハ、更ニ約二百騎ニ増加セルコト、同日、城津ニハ三十騎出現シ、我カ居留地ヲ燒キテ翌日退去セルコト等ノ情報ニ接シ、其ノ後、又約二百五十騎、十九日頃吉州ヲ出發シテ、北青ニ向ヘリ、トノ諜報アリ、偶二十二日、第二戰隊以下入港セルヲ以テ、高木元山守備隊長ハ、上村第二艦隊司令長官ヲ訪問シ、交渉ノ結果、陸兵ヲ城津地方ニ派遣スルヲ要スル際等ニハ、武部第十一艇隊司令ニ諮リ、又運送船金州丸ヲモ、便宜其ノ目的ニ使用シ得ヘキコトニ決シ、同隊長ハ、即日艇隊及ヒ金州丸ニテ、一部隊ヲ城津地方ニ派遣シタキ旨ヲ、在京城韓國駐劄軍司令官陸軍少將原口兼濟ニ具申シ、同司令官ハ、更ニ之ヲ參謀本部ニ電報セシニ、同次長ヨリ差遣セラルヘキ兵ト、艦隊若クハ水雷艇ト、絶エス連絡スルヲ得ハ實行セヨ、トノ返電ヲ得タルヲ以テ、二十三日之ヲ高木守備隊長ニ電報セリ、是ニ於テ同隊長ハ、武部第十一艇隊司令及ヒ溝口金州丸監督官ニ諮リ、愈、陸兵派遣ノコトニ定リシカ、第二戰隊以下ノ浦鹽斯德方面ニ到着スルヲ豫測シ、其ノ後ニ於テ、城津ニ達スルヲ安全ナリト爲シ、出發ヲ二十四日午後六時ト定メ、二十五日城津ニ著シ、二十六日午後ニハ、元山津ニ歸港スヘキコトニ豫定セリ、然ルニ二十四日ニ至リ、天



候不長ノ兆アリシヲ以テ、出發ヲ延期シ、同日午後八時、第九中隊(將校三名特務曹長一名下)及ヒ大本營ヨリ派遣セラレ居リシ陸軍歩兵大尉櫻井久我治(同官附屬ノ下士一名)高木守備隊長ヨリ特派スル陸軍歩兵中尉寺田龜之助(同官附屬ノ卒一名同行ス)等金州丸ニ乗シ、翌二十五日午前六時元山出發ノ事トナリシカ、城津ニ至ルトスレハ、二十六日マテニ歸著シ得サルヲ以テ、上陸地ヲ利源ニ變更シ、(高木守備隊長ハ瀋陽川附近ヲ希望セシモ)武部艇隊司令ハ、溝口監督官ト、若シ敵ニ遭遇セハ、艇隊ハ戰鬥ニ從事シ、金州丸ハ極力逃去スヘキノ口約ヲナシ、豫定ノ如ク出發シ、金州丸ヲ先頭トシ、水雷艇ハ之ヲ護シテ警戒航行シ、午後二時利源ニ著シ、水雷艇ハ先ツ上陸地點ノ偵察及ヒ掩護ヲナシ、(備考文)中隊及ヒ櫻井大尉等ハ、六隻ノ端艇ニテ直ニ上陸シ、那守ニ就キテ狀況ヲ尋問シ、武部艇隊司令モ亦海軍中尉森本免久身及ヒ通信兵ヲ中隊ニ隨行セシメタリ、(備考文)而テ幾モナク調査ヲ了リ、中隊以下ハ、再端艇ニテ五時二十分乗船ヲ始メ、六時全ク之ヲ了レリ、是ヨリ先キ碇泊中、水雷艇ノ動搖漸次増加シ、且晴雨計モ降下セルヲ認メタルヲ以テ、武部艇隊司令ハ、天候ノ異變ヲ慮リタルカ爲メ、金州丸ト別レテ同夜(遼瀋灣)ニ泊シ、翌朝馬養島ヲ經テ元山ニ歸ラント欲シ、溝口金州丸監督官ニ其ノ旨ヲ告ケ、且同船ノ單獨歸航スヘキヲ諮リシニ、溝口少佐モ亦之ヲ承諾セシニ由リ、第十一艇隊ハ遼瀋灣ニ到リ、陸上ヲ偵察シテ、同處ニ泊シ、(備考文)金州丸ハ單獨利源ヲ拔錨シテ、先ツ浦鹽斯德方面ニ向フカ如ク裝ハンカ爲メ、暫ク東南東ニ航シタル後、南東ニ變針シ、七時三十分ヨリ南ニ、八時ヨリ南西微西ニ針路ヲ取リテ元山津ニ向ヘリ、時三四邊薄霧アリ、月色朦朧トシテ風微ニ波穩ナリ、十時四十分頃新

浦錨地ノ南東約十九海里ノ處ニ到リシニ、偶右舷船首ニ當リ、無燈ナル二隻ノ船ヲ發見シ、乗組一等運轉士赤松喬二ハ、直ニ海圖室ニ在ル船長八木政吉、及ヒ微恙ノ爲メ私室ニ在ル溝口監督官ニ、之ヲ報告セシヲ以テ、何レモ直ニ船橋ニ出テ、溝口少佐ハ、信號ノ用意ヲ命シ、汽船ヲ凝視シ居タルニ、彼我漸次接近シ、其ノ小船ニアラサルコトヲ認メタルモ、常ニ船首ヲ金州丸ノ船橋ニ向ケ居ルヲ以テ、船形ヲ確ムルコト能ハザリシニ、愈近ツクニ及ヒ、彼ハ急遽針路ヲ左轉シタルヲ以テ、煙突及ヒ櫓等ヲ數フルヲ得、溝口少佐ハ始テ二隻ニ止ラスシテ「ロシーヤ」グロモボイ、「ボガツイリ」及ヒ水雷艇二隻ヨリ成ル露國浦鹽艦隊ナルヲ知レリ、之ト殆ト同時ニ、露艦ハ一發ノ空砲ヲ放チテ、金州丸ニ停止ヲ命シ、同船ハ之ニ應シテ、進航ヲ停止セリ、溝口少佐意ヘラク、同船ニハ僅ニ「ホチキス」四七密砲三門アルニ過キサレハ、之ヲ以テ抗スルモ、敵ニ何等ノ損害ヲ與フルコト能ハス、又逃走セントスルモ、既ニ包圍ノ狀ニ陥リ、(敵艦ハ金州丸ヲ距ルニ在リシ)到底目的ヲ達スルヲ得サレハ、寧ロ乗員就中非戰鬥員(當時金州丸ノ船員七十二名ニシテ外ニ海軍主計官一名同下士卒十七名)尙同船ニハ前記陸兵及ヒ監督官ノ人夫七十七名商人三名乘リ居レリノ生命ヲ保全スルノ方法ヲ講スルニ若カスト、乃チ先ツ主計長海軍大主計飯田庸治ノ意見ヲ質セシニ、又乗員ノ救助ヲ爲スノ外、策ナカルヘキヲ述フ、是ニ於テ溝口少佐ハ、直ニ主計長ト共ニ、重要書類等ノ敵手ニ落チサルノ處置ヲ爲シ、尋テ其ノ意ノアル所ヲ陸軍將校船長等ニ告ク、此ノ時露艦「ロシーヤ」ハ、著シク金州丸ニ接近シ、「メカホー」ヲ以テ船名及ヒ國籍ヲ問フ、依リテ日本汽船金州丸ナルコトヲ答ヘシニ、彼ヨリ悉ク船ヲ退去セヨト通告シタルヲ以テ、溝口少佐ハ之ニ向ヒ、一時間ノ猶豫ヲ請求シ、直ニ總員退去

ノ爲メ、端艇ノ用意ニ著手シ、又別ニ一端艇ヲ獲シ、之ニ二名ノ海軍兵員ヲ乗セ、陸岸ニ逃レシメ、以テ遭難ノ狀ヲ元山津若クハ本國ニ通知セントセリ、(同端艇ハ本船ヲ去ル遠カラステ敵メ、然ルニ船内頗ル混雜シ、到底一時間内ニ、乗員全部ヲ退船セシムルコト能ハサルヲ以テ、溝口少佐ハ飯田主計長等ト諮リ、尙時間ノ猶豫ヲ請ハンカ爲メ、赤松運轉士ニ後事ヲ命シ、飯田主計長、八木船長ト共ニ、水兵二名ヲ從ヘ、傳馬船ニ搭シテ敵艦「ロシーヤ」ニ赴キ、櫻井歩兵大尉モ亦若干ノ船員等ト共ニ、他ノ端艇ニ乗シテ同シク敵艦ニ赴ケリ、而テ溝口少佐等ハ敵ノ將校ニ面會シ、金州丸ニハ端艇少クシテ退船ニ困難ナル旨ヲ告ケ、更ニ一時間ノ猶豫ヲ要求セシニ、彼ハ之ヲ承諾セルカ如キ狀アリシモ、忽チ溝口少佐以下ヲ抑留シテ俘虜トナシ、一名ノ露國將校ハ、七八名ノ兵員ヲ引率シ、八木船長ノミヲ伴ヒテ金州丸ニ至リ、船内ヲ巡視セリ、是ヨリ先キ溝口少佐等ノ敵艦ニ赴クヤ、金州丸ニテハ、赤松運轉士ハ殘留セル端艇三隻、傳馬船二隻ヲ準備シタルモ、一時ニ總員ヲ乗船セシムル能ハサルヲ以テ、其ノ旨ヲ中隊長陸軍歩兵大尉椎名三藏ニ告ケシニ、同大尉ハ先ツ非戰鬥員ヲ救助セヨト言ヒタルヲ以テ、乃チ陸兵以外ノモノヲ三分シテ、三端艇一傳馬船ニ分乗セシメ、自己モ其ノ中ナル一隻ノ端艇ニ乗シ、(此ノ際商人三名船夫六名水雷發射前傳馬船一隻ニ乗「ロシーヤ」ニ至リシニ、更ニ「グロモボイ」ニ行クヘキヲ告ケテ乗船シテ終ニ陸岸ニ逃レタリ)「ロシーヤ」ニ至リシニ、更ニ「グロモボイ」ニ行クヘキヲ告ケテ乗船ヲ許サ、リシカ爲メ、更ニ「グロモボイ」ニ赴キ、數隻ノ端艇ヲ金州丸ニ送ランコトヲ請求セシニ、彼ハ承諾ヲ裝ヒ、赤松運轉士以下ヲ收容セリ、是ニ至リテ金州丸ニ留レルモノハ、陸軍部隊ノミトナリ、椎名中隊長ハ、下士卒ノ船室ニ赴キテ、船ト運命ヲ共ニスヘキヲ訓諭シ、且如何ナル

場合ニ陥ルモ、我カ軍ノ情況等ヲ敵ニ知ラシムヘカラサルヲ戒メシニ、兵士皆從容トシテ命ヲ聞キ、中隊長ノ去ルヤ、天皇陛下ノ萬歲ヲ三唱セリ、而テ同中隊長ハ、祕密圖書等ヲ燒棄セシメ、小隊長陸軍歩兵中尉横田信三、同少尉檜垣正和、特務曹長鷲康勝及ヒ便乗者寺田陸軍歩兵中尉ヲ一室ニ會シ、訣別ノ宴ヲ開キテ、以テ靜ニ運命ヲ待テリ、時ニ敵ノ將校水兵ヲ率非、八木船長ヲ案内トシテ船内ヲ巡視シ、椎名中隊長等ノ一室ニ在ルヲ見ルヤ、小銃及ヒ拳銃ヲ擬シツ、全員ヲ收容スヘキヲ以テ、露艦ニ來ルヘキヲ強フ、我カ小隊長等之ニ抗セント欲セシモ、椎名中隊長ハ之ヲ制止シ、敵ノ行爲ニ任スニ決シ、小隊長等モ亦終ニ之ニ同意シ、敵ニ擁セラレテ其ノ端艇ニ移ル、(中隊長ノ從卒一名)此ノ際椎名中隊長ハ、敵ノ將校ニ向ヒ、部下下士卒ノ處置ヲ問ヒシニ、彼ハ露艦ニ收容スヘキヲ答ヘタルヲ以テ、八木船長ハ金州丸ニ留リ、其ノ收容了ルト共ニ、露艦ニ移ルヘキヲ告ケシモ、敵ノ將校肯セス、之ヲ強制シテ其ノ端艇ニ乗セ、又此ノ前後ニ於テ、我カ下士卒ノ船室ヲ臨檢シ、遙ニ「ロシーヤ」ニ在ル露國將校ト數語ヲ交ヘタル後、金州丸ヲ離レテ「ロシーヤ」ニ歸リ、將ニ之ニ著セントスルノ際、敵ノ將校再同艦ト一二語ヲ交フルヤ、忽然同艦ヨリ發射セル魚形水雷ハ、金州丸ニ命中ス、時ニ二十六日午前一時三十分ナリ、(尋テ中隊長以下ハ艦)金州丸ニ在リシ我カ下士卒ノ船室ハ、敵水雷ノ爲メ海水侵入シ、下士卒ノ一部ハ此處ニ自殺シ、他ハ小銃ヲ取りテ上甲板ニ出テ、敵艦ニ向ヒ射撃ヲナシテ、悲壯ナル抵抗ヲ試ミシニ、敵艦モ亦激烈ナル砲撃ヲナシ、同二時頃ニハ、第二回ノ水雷ヲ發射シ、金州丸ハ之カ爲メニ沈没シ、下士卒或ハ戰死シ、或ハ自殺ス、敵ハ金州丸ノ沈没ト共ニ射撃ヲ止メテ、他方ニ

去レリ、而テ我カ中隊中ノ下士卒四十五名ハ、二隻ノ端艇ニ乗シ、其ノ一隻ハ、同日午後五時三十分、馬養島ニ著シ、之ニ乗レル下士卒三十七名ハ、同地ニ在ル本邦人萩村壽之助ヨリ衣食ノ給與等ヲ受ケ、他ノ一隻ハ、九時南湖ノ海岸ニ著シ、之ニ乗セル八名ハ、韓人李翊洙ノ援助ヲ受ケ、翌二十八日正午頃新浦ニテ相會シ、尙曩ニ逃レタル商人、人夫等モ集合シ、又萩村ハ、二十七日急ヲ大木副領事及ヒ高木守備隊長ニ電報セリ是ニ於テ同副領事ハ、高木守備隊長ト協議シ、港内ニ在リシ汽船泰盛丸ヲ直ニ救助船トシテ新浦ニ派シ、(同船ハ生存下士卒ヲ收容シ)一面ニハ之ヲ外務省ニ報告シ、高木守備隊長モ亦大本營ニ電報シ、二十八日ニハ搜索ヨリ歸著セル福井千早艦長モ亦伊東海軍軍令部長ニ、搜索ノ結果及ヒ金州丸遭難ノ大要ヲ打電セリ、(備考文)然レトモ沈没ノ情況未タ要領ヲ得サルヲ以テ、伊東海軍軍令部長ハ、二十九日福井千早艦長ニ向ヒ、爲シ得ル限り速ニ其ノ事情ヲ取調フヘキコト、及ヒ陸兵派遣ニ關シ、武部第十一艇隊司令及ヒ溝口金州丸監督官ハ、上村第二艦隊司令長官ヨリ、如何ナル訓令ヲ受ケシヤヲ電報スヘキヲ命シ、又各司令長官及ヒ其ノ他ノ要所ヘ、金州丸ニ在リタル信號書、暗號書等ノ處分未タ明ナラサルヲ以テ、通信上ニ充分ナル警戒ヲ加フヘキヲ電報シ、同部長ハ、同日福井千早艦長ヨリ、前記ニ電報ニ關スル返電、及ヒ大木副領事ヨリモ、金州丸遭難ニ關スル稍詳細ナル電報ニ接シ、(備考文)尋テ參謀本部ヨリモ、高木元山守備隊長ノ電報ヲ送付セリ、(備考文書及ヒ別冊附表參照)以上ヲ金州丸遭難顛末トナス

第三節 浦鹽斯德艦隊ノ行動

明治三十七年二月二十四日ヨリ、第二回ノ出動ヲ元山津方面ニ試ミ、三月一日歸港シタル浦鹽斯德艦隊ハ、六日、我カ第二艦隊ノ同港ヲ砲撃セルニ當リ、ボスフオラス海峽入口附近ニ在リシカ、我カ艦隊ノ引揚ケ後、一旦東口外ニ出テ、幾モナクシテ再港内ニ引返シ、翌七日、再我カ艦隊ノ出現ヲ知リシモ、遂ニ出港セス、爾來日中、専ラ諸種ノ操練ニ從事シタルモノ、如シ、是ヨリ先キ、海軍少將カル、ペトロツ非ツチ、イエスセンハ、レイツエンシテイン大佐ニ代リテ、太平洋艦隊司令官ニ補セラレ、露都ヲ出發セシカ、十六日浦鹽斯德ニ著シ、レイツエンシテイン大佐ト交代シ、依然「ロシーヤ」ヲ以テ、其ノ旗艦トナシ、屢操練或ハ艦隊運動等ノ爲メ近海ニ出動シ、或ハ「ボガツイリ」或ハ「リユーリク」或ハ「レーナ」ニ乗シ、時ニ獨リ偵察ノ爲メ出港セリト云フ、斯ノ如クニシテ、四月二十三日迄港内ニ留リシカ、同日午前、「ロシーヤ」以下ノ四隻、及ヒ若干ノ水雷艇ヲ率非テ出港セシニ、濃霧ニ會シテ約三時間港口ニ投錨シ、午後再進航シテ、先ツスクリプレツフ島附近ニ到リ、再投錨シ、同處ニテ港務部ノ汽艇ヨリ生糧品等ヲ搭載シ、(約十日分ヲ搭載ヒリト)イエスセン司令官ハ、各艦長等ヲ旗艦ニ招キテ會議ヲ開キ、其ノ結果速力遅キ「リユーリク」ヲ歸港セシメ、他ノ三巡洋艦及ヒ水雷艇第二百五號、第二百六號ハ、先ツ元山津ヲ偵察シ、其ヨリ水雷艇ハ浦鹽斯德ニ歸港シ、巡洋艦ハ日本海ヲ航シ、津輕海峽ニ向ヒ、時宜ニ依リ、函館ヲ砲撃セントノ議ヲ決シタルモノ、如ク、同日夕刻投錨シ、濃霧ヲ冒シテ元山津ニ向ヒシニ、二十四日午前、異様ナル無線電信符ヲ感シ、豫テ旅順口ヨリ回送シアル我カ文字符ニ照ラシ、我カ艦隊ノ其ノ附近二十海里以内ニ在ルヲ覺リ、尋テ其ノ後再感應ナカリシニ由リ、我カ艦隊ヲ以

テ、浦鹽斯德方面ニ向ヒ、互ニ相反航セルモノト判斷セルカ如シ、而テ翌朝元山ニ到達スヘキ豫定ヲ以テ速力ヲ加減シ、其ノ途中ニ於テ、イエスセン司令官ハ麾下ニ向ヒ、函館砲撃ニ際シテ各艦ノ發射スル彈數ハ、函館砲臺ニ向ヒテハ、六尹砲ハ三發ツ、八尹砲ハ二發ツ、同市街ニ向ヒテハ、六尹砲ハ五發ツ、八尹砲ハ三發宛トシ、砲撃時間ハ、半時間以内ト定メ、二十五日ノ早朝ニハ、元山津ヨリ三十海里ノ沖ニ達セシヲ以テ、同司令官ハ兩水雷艇ニ命スルニ、元山津ニ入り、港内ニ碇泊スル日本船舶アラハ之ヲ爆破シ、艇隊ハ港内ニ入り我カ五洋丸ヲ發見シ、之ヲ毀スヘキヲ以テセリ、斯テ艦隊ハ港外ニ漂泊シ、艇隊ハ港内ニ入り我カ五洋丸ヲ發見シ、之ヲ轟沈シテ(導火藥罐ヲ以テ爆發ヲ試ミシモ故障アリテ爆發セザリシカ)歸隊セシカ、兩艇共行動中、全速力ニテ駛走セル結果、汽罐ノ水罐ニ鹹ヲ現シタルカ爲メ、艦隊ハ五海里ノ速力ニテ之ヲ曳キツ、新浦ニ向ヒ、途中修理成リシヲ以テ之ヲ離シ、炭水ヲ供給シ、夕刻ニ至リ偶我カ我カ浦丸(同船ハ在大阪田中松之助ノ所)ノ反航スルアルヲ發見シ、「ボガツイリ」ハ之ヲ臨檢シ、其ノ乗員全部ヲ同艦ニ移シ、「グロモボイ」ノ端艇ハ、導火藥罐ヲ以テ同船ヲ爆沈セシメ、尋テ同艦隊ハ、十八海里ノ速力ヲ以テ、北八十一度東ノ針路ヲ取り、以テ豫定ノ如ク津輕海峽ニ向ヒシト云フ、(編者曰ク金州丸船員等ノ見ル所ニテハ同船遭難ノ際彼ハ水雷艇ヲ伴ヒ居リシモ露國)而テ夜ニ入りテヨリ我カ金州丸ニ會シ、直ニ相接近シテ之ヲ停止セシメ、其ノ國籍等ヲ知り、尋テ我カ溝口監督官及ヒ船長等ヲ收容スルヤ、イエスセン司令官ハ、將校ヲ金州丸船長ト共ニ同船ニ派シ、殘留セルモノアラサルヤヲ確メシメタルニ、臨檢中我カ陸兵ノ船内ニ在ルヲ發見シ、

數名ノ將校ヲ捕ヘ、下士卒ハ降服ヲ肯セサルモノト認メ、派遣將校ハ之ヲ「ロシーヤ」ニ報告シ、尙船内ニハ四十七密米砲四門アルヲ告ケタルヲ以テ、其ノ端艇同船ヲ離レタル後、水雷及ヒ砲彈ヲ以テ之ヲ擊沈セシカ、其ノ際我カ陸兵ノ壯烈ナリシ態度ハ、敵ヲシテ感嘆セシメタリト云フ、(金州丸ハ水雷發射後約十七分ニテ)此ノ如クニシテ溝口同船監督官以下多數ノ人員ヲ俘虜トシテ艦内ニ收容セシ爲メ、方一ノ變アルヲ慮リテ、函館要塞砲撃ノ行動ヲ中止シ、(ロシーヤ)乘録ニ我カ金州丸ノ乗員ハ「ロシーヤ」ト「グロモボイ」ノ二艦ニ收容シ、(ロシーヤ)副長ハ函館獲セシ我カ小銃及ヒ長劍銃槍ノ如キ武器ハ總テ海中ニ投棄セシメタリトアリ又函館要塞砲撃ヲ中止セシハ砲撃中万一何か椿事出來セハ我カ俘虜ハ如何ナル暴(二十六日午後浦鹽ヨリ北方約百海里ニ在ルシヨウウ灣)露名アレフニ針路ヲ向ケ、二十七日午前同灣ニ達シ、其ヨリ岸ニ沿ツテ南下シボボトヌイ燈臺、尋テアスコルド燈臺ニ向ヒテ、我カ艦隊ノ有無ヲ質シ、其ノ在ラサルコトヲ確メテ港口ニ向ヒ、同日日沒頃歸港シタリト云フ、(ロシーヤ)乘組將校ノ手録ニ下ノ如キ記明セリ、(蓋此ノ驅逐隊カ之ヲ放棄セシ所以ハ元山マテ運送船ヲ護衛スルヲ以テ自己ノ使命ヲ全クシテ)元山以北ニハ日本艦隊ノ存在スルモノアリト認メ、(ハナリ誰カ其ノ背後ニ吾人ノ出現ヲ期スルモノアラシヤ)海軍少佐ナル日本人ノ語ル所ニ據レハ彼等ハ吾人ヲ認メテ「ロシーヤ」型ニ似タル英國東洋派遣軍艦ナリト認メ、尋テ端艇來著シ艇内ヨリ露國將校ノ現ルヲ見、(ハナリ誰カ其ノ背後ニ吾人ノ出現ヲ期ス)誤認ヲ知リシナリト云フ將校等ハ決シテ何等ノ事實ヲ語ラス之ニ反シ、(下級員ハ概シテ喋リ好キ)隊ハ十隻ノ巡洋艦ヨリ成リ此ノ中ニハ春日和泉千代田等アリ其ノ他水雷艇四隻驅逐艦二隻運送船二隻中一隻ハ吾人ノ擊沈セルモノヲ含ミ下ノ關ヨリ出テ浦鹽斯德港口ニ水雷ヲ沈置スルカ爲メ出動セルノ爲メ金州丸ハ派遣邊リノ處ヨリ元山ヘ歩兵第三十七聯隊ノ一部ヲ移スノ必要ヲ感シ其ノ搭載セル之ニ據テ見ルトキハ吾人カ上村艦隊ト遭遇セザリシハ全ク天運ナリ又同日日本人ノ語ル所ニ據レハ我カ哥薩克兵ハ日本軍ノ占領セル韓村ニ日曜日ノモハ上村艦隊ノ電信ヲ感得ハ無線電信ハ何レノ途ニモ有利ノ效ヲ有セルヲ知ル儘ニ日曜日ノモハ上村艦隊ノ電信ヲ感得

シタルナリ此ヨリ海上ニ在リテハ決シテ無線電信ヲ使用ス  
ヘガラス常ニ之ヲ受信装置ニ備フヘキ旨達セラレタリ云々

## 第五章 第二次出動後ニ於ル第二艦隊ノ行動

### 第一節 第二艦隊ノ行動概要

浦鹽斯德方面第二次行動後、韓國松田灣ニ於テ東郷聯合艦隊司令長官ヨリ、竹敷要港ヲ本據トシ、主トシテ浦鹽斯德ノ敵ニ對シ、朝鮮海峽ノ安固ヲ保持スルニ努ムヘキ電命ヲ受ケタル上村第二艦隊司令長官ハ、五月四日鎮海灣ニ入り、佐世保軍港ヨリ來レル松山丸、濟州丸、及ヒ松田灣ヨリ同行セシ太郎丸、觀音丸等ヨリ、糧食炭水ヲ麾下ノ諸艦艇ニ補充セシメ、尾崎灣ニ於ル第二艦隊ノ豫定錨地(別冊附圖)及ヒ警戒探照區域(別冊附圖)ヲ定メ、又警戒監視ニ關シ、左ノ命令ヲ發セリ、

- 一、浦鹽方面ノ敵ニ關シテハ其ノ後何等ノ情報ニ接セス
- 二、第一第三艦隊ハ第二軍第一梯團ノ上陸護衛及ヒ旅順港ノ直接封鎖中ナリ
- 三、當艦隊ハ竹敷要港ヲ本據トシ主トシテ浦鹽ノ敵ニ對シ朝鮮海峽ノ安固ヲ保持スルノ任務ヲ有ス
- 四、第四艦隊(第十一艦隊ヲ附ス)ハ何分ノ命アルマテ鎮海灣ヲ根據トシ對馬西水道ノ警戒監視ニ任シ且常ニ第二艦隊ト連絡ヲ保持シ相協力シテ敵ヲ擊破スルヲ努ムヘシ
- 警戒監視ノ方法ハ左ノ要領ニ從ヒ瓜生司令官之ヲ定ム

(イ) 巡洋艦一隻ヲシテ晝間鎮海灣口ヨリ第三八六地點(編者曰ク韓崎ノ東北東三十二海里ナリ)ニ到ル海面ヲ巡邏警戒セシメ日沒頃ヨリ終夜加德水道附近ニ碇泊シ監視艇隊ノ通信ヲ受繼カシム

(ロ) 水雷艇二隻ヲシテ夜間鎮海灣口ヨリ韓崎ニ至ル海面ノ警戒監視ニ任セシム

五、第二艦隊(第一驅逐隊及ヒ第十五艦隊ヲ附ス)ハ急速炭水ヲ補充シ尾崎灣ニ到リ同灣ヲ根據トシ常ニ對敵ノ準備ヲ整ヘ敵ヲ迎撃シ之ヲ殲滅セントス

六、第二艦隊ハ左ノ要領ニ從ヒ水道ノ警戒監視ヲ行ハントス

(イ) 其ノ一艦ヲシテ晝間第二五二地點(編者曰ク韓崎ノ正西十八海里ナリ)ヨリ第二六四地點(編者曰ク西四十分ノ三西十八海里ナリ)間ヲ巡邏警戒シ夕刻迄ニ尾崎灣ニ碇泊セシム

(ロ) 夜間驅逐艦二隻ヲシテ大口灣口ト鴻島トノ間水雷艇二隻ヲシテ三浦灣口ト壹岐島トノ間ノ海面ヲ警戒監視セシム

(ハ) 右ノ外水道監視ノ事ニ關シテハ尙竹敷要港部司令官ト協議シ之ヲ決定セントス

七、警戒ノ任務ニ從事スル艦艇ハ常ニ總艦ニ點火シアルヲ要ス

八、特設地區信號及ヒ無線電信緊急信號等ハ別ニ之ヲ規定ス(編者曰ク第四部第三篇無線電信ノ部ニ乙隊機密第揭ク(二八六號)

尋テ五日、上村司令長官ハ、第二艦隊以下ヲ率非テ尾崎灣ニ入り、豫定位置ニ繫留シ、第二艦隊ノ監視艦艇順序及ヒ碇泊中ニ於ル艦船警戒方法等ヲ定メ、(第二節 參照)又竹敷要港部司令官海軍中將